

## ～～～ 1 はじめに ～～～

犬のしつけをまじめに考える人は、たいてい何冊もの本を読んでいるものです。ところが、何種類も出ている市販のしつけ本の中には正反対のことを書いているものもあり、初心者を迷わせてしまいます。この本の通りにやっとうまく行かなかったから別の本のやり方で、というような試行錯誤になりがちで、熱心な人ほどかえって犬を混乱させていじり壊してしまうことがあります。テレビ番組でも魔法のように問題を解決して見せるパフォーマンスがありますが、それをまねてうまく行く場合もあればかえって逆効果になることもあります。

指導書やテレビなどの情報、経験者からのアドバイス、いずれも有用な情報を含んでいますが、犬の性格や状況によって適不適は違います。また、一見科学的な言い回しでも、全く理に適っていないこともたくさんあります。「本に書いてあった」「テレビでやっていた」「偉い先生が言っていた」というだけで断片的なことを鵜呑みにするのではなく、自分の頭で素朴に一から考えてみましょう。ごく常識的な感覚で犬の立場になって考えて行けば、おのずと方向性が見えてきます。そうすれば、その場しのぎではなく、一貫した方針で自信を持って犬と接して行くことができるはずです。

筋道を立ててしつけやトレーニングを考えていただくために、これから、理論を踏まえながらもできるだけ専門用語は使わずに、具体的なエピソードも含めてお話しして行きます。

## ～～～ 2 基本的な考え方・接し方 ～～～

### 【1. 家庭犬と作業犬】

警察犬、軍用犬、救助犬、補助犬、狩猟犬、プロ的なスポーツドッグなどは、特定の作業をする目的で飼われる犬です。一方、一般家庭の犬は、家族の一員として楽しく日常生活を送るのが目的で飼われる犬です。

ひと昔前は犬のトレーニングといえば作業犬の訓練が中心でした。家庭犬のしつけ指導もその延長として、基礎課目（来い・待て・すわれ・ふせ・つけ）のトレーニングを主体に指導されることが多かったようです。家庭犬のしつけは作業犬訓練の初級段階という考

え方です。しかし、家庭犬はレベルの低い作業犬ではありません。

一般の家庭では、24時間のうち号令をかけている時間はごくわずかしかないとはいえません。家庭犬にとっては、作業犬とは反対に、命令を受けていない何気ない時間の行動こそが重要なのです。家庭犬に対してどんなに厳しく号令の訓練を入れても、自発行動をどのようにコントロールするか、という観点がいれば良い伴侶にはなりません。そして、日常生活の何気ない行動を観察し、トレーニングできるのは、一緒に暮らしている飼い主だけなのです。また、家庭犬においては、いかなるトレーニングも飼い主と犬との良好な関係を土台にしたものでなければいけません。課目の形を作ることや問題行動を早く直すことばかりに気を取られ、飼い主と犬との関係にマイナスが出るようでは本末転倒です。

課目（号令）を教えるだけなら、素人がやるよりは専門家に訓練してもらった方が早いのは当然ですが、ドタバタしながら犬と飼い主がともに成長して行くこと自体、犬と暮らす楽しみのひとつであり、自然なリーダーシップにもつながると思います。優れた専門家の指導を受けるのは良いことですが、その際には、預託訓練ではなく、訪問指導か飼い主が犬を連れて参加する教室をお勧めします。そして、課目の見た目にとこだわったり上下関係ばかりを強調する指導者ではなく、犬の個性を見極め、犬の気持ちを尊重して柔軟に対応してくれる指導者を選んで下さい。

## 【2. 犬がどう感じるのかを常に意識する】

犬のトレーニングにおいてもっとも大切なことは、犬の心理状態や思考回路をどれだけ正確に推測できるか、ということです。犬は何を考えて行動しているのか、人間の働きかけは犬にとってどのように受け取られるのか、それを把握することによって初めて効果的なしつけや訓練が可能になります。基本的には、自分が犬の立場ならどう感じるかを常に意識すれば良いのですが、犬は言葉がわからないだけでなく言語で物事を考えることができません。（論理的な思考ができない）この大前提を心に留めた上で、擬人化をするのではなく、本当の意味で犬の気持ちになって接して下さい。

飼い犬にとって、一緒に暮らしている人間の行動は常に何らかの影響を与えています。犬から見える場所での自分の行動はすべてトレーニングの一環だと考えてください。たとえば、犬が戸をガチャガチャと引っ掻いた時に思わず振り向けば、「関心を向けてほしい時は戸を引っ掻けば良い」と学習してしまいます。また、犬の方から視線を向けてきた時にすかさずほめてやっていけば、自然にアイコンタクトが取れるようになります。このよ

うに犬の一挙手一投足について気を配り、特定の行動を抑制したいのか促進したいのか、あるいは何らかの合図でその行動を取らせるようにするのか、常に考えながらこちらの対応を決めてください。

### 【3. 人間の要求と犬の欲求を一致させる】

犬のしつけがうまく行かない人の多くは、無意識に犬の要求に振り回されていたり、逆に人間の都合でやりたくないことばかりを命令していたりすることが多いようです。楽しいことや嬉しいことは常に人間に従うことによってもたらされる、というように演出してください。最初の段階では決して無理なことはせず、お散歩、食事やおやつ、こちらに来ること、興味のあるものに駆け寄ること、等々、犬がその時に望んでいることを、まず号令を発してからやらせて、言うことを聞いたように演出してほめてやります。こうすれば自然に人間の発する号令に敏感になります。

次に、いろいろな号令のトレーニングについても、人間がさせたいことを犬がやりたいと思うように仕向けてやります。たとえばケージに入る号令を教える場合、目の前でケージの中におやつを入れて扉を閉め、「待て待て」という声をかけながらしばらくじらしてから「入れ」の号令とともに扉を開けてやります。何度かこのトレーニングをしたら、最初におやつを入れることをせず、「待て・・・入れ」で入ってから褒めておやつを与えます。（入った途端に閉じ込めてはいけません）これは一例にすぎませんので状況によっていろいろ工夫してください。

ケージから出す時など、人間の要求と犬の欲求が最初から一致している時にはおやつなどのごほうびを与える必要はありません。自由にさせて勝手にその行動を取らせるのではなく、いったん「待て」をかけることでさらに欲求を高めつつ、「出て」の号令を与えて命令に従ったように演出してやります。通常、トレーニングを意識しなければ、人間にとって好都合な行動は自然に任せておくことが多いと思いますが、かならずいったん制止してから命令としてその行動を取らせるようにするのがコツです。

いずれは気が進まないことでも従うように強制力をつけて行く必要がありますが、最初に「号令に従うと良いことがある」ということを徹底的に植えつけることによって、強制を必要とする機会はごく少なくなります。

いくつかの号令を覚えたあとは、嬉しいことの前には必ず何らかの仕事をする、という習慣を作っていきます。たとえば、お散歩や食事の前には「お座り」「お手」「伏せ」な

どを順不同でやらせるのも良いでしょう。レパトリーが広がれば、持来（持って来い）などを組み入れればお手伝いにもなります。「仕事をするると良いことがある」「嬉しいことの前には必ず何らかの仕事をする」ということを自然に習慣にして行きます。

#### 【4. 常にわくわくさせる存在になる】

室内飼いでいつも全く自由にさせている犬は、人間の働きかけに対して飽きてしまっていることがあります。楽しいことも飽和状態にしてしまえば価値がなくなります。トレーニングのためには、飼い主に対して適度な飢餓状態を作っておいた方が効果的です。常に飼い主の動向に注目するように仕向けてください。

また、毎日一緒に生活していると、どうしても犬への接し方がパターン化してきます。次第に「上着を着たから散歩だな」とか「そろそろご飯の時間だ」とか、飼い主の行動が読まれてしまうようになります。こうなると、いつ嬉しいことがあるのかがあらかじめ分かかってしまい、生活の中でワクワクすることが少なくなってきます。たまにはとんでもない時間に散歩に連れ出してやったり、食事を小分けして何度も与えてやったり、犬の予想を覆すようなことをしてみてください。訓練のパターンも一定にせず、ご褒美がいつもらえるのかも予想できないようにします。

遊んでもらえる気になっている時やご褒美が出るだろうと思っている時にはそっけなくはずされる。かと思うと、予想もしない時に思わぬボーナスが出る。そうすると、犬は飼い主に対して「次はいつ何をしてくれるのだろうか」と常にわくわくしながら注目するようになります。

常に予想を外す、ということは犬との知的ゲームのようなものです。犬に負けないように頭を働かせてみてください。さらに、おとなになっても常に新しいことを教え、新しい遊びを考えて、知的な刺激を与え続けてください。

### ～～～ 3 リーダーシップについて ～～～

「犬に民主主義は通用しない。飼い主は専制君主的でなければいけない」などと書かれた本がありますが、せっかく家族として楽しく暮らすために迎えた犬に対して、専制君主と隷民の関係を作らなくてははいけないとしたら、こんなにつまらないことはありません。

「犬はリーダーを頂点とした群れ社会を作るから」というのがこのような主張の根拠ですが，“リーダーが統率する社会”がどうして“専制君主制”に飛躍するのか理解に苦しみます。抑圧的なトレーニングを合理化するために理屈をこじつけたものと思われま

### 【1. リーダーになれるワザとは？】

犬を仰向けにして押さえる，後ろからはがい締めにする，馬乗りになる，マズルをつかむ，などの行為を，“オオカミのリーダーが優位を示す行動だから，それを人間がまねることで，犬に対してのリーダーシップが取れるようになる」として紹介している指導書があります。ロールオーバー，ホールドスチール，マウント，マズルコントロールなど，格闘技のワザのような名称もついています。

しかし，常識的に考えてみれば，発想の順序が全く逆であることが明らかです。

人間どうして考えてみましょう。上司と部下，あるいはグループのリーダーとメンバーは，言葉づかいや態度をよく見ていれば第三者でも区別がつかます。では，初対面の人間どうし，あるいは同格の人間どうしで，自分がリーダーになりたいからといっていきなりリーダーのような態度を取ればどうなるでしょうか。リーダー（あるいは上役）になった結果として自然に出てくる態度を，リーダーとして認められてもいないのに先行させてしまえば，むしろ反感を持たれるのがおちで，相手の性格によっては喧嘩にも発展します。ヒトもイヌも同じく群れ社会を構成する動物ですから，このような素朴な感覚も共通しているものと想像できます。

無理な拘束は防御的な威嚇行動を誘発することがありますが，これをリーダーシップが取れていないための反抗と解釈すれば，さらに強引な拘束を試みることになります。それをきっかけに飼い主に対する攻撃的噛みつきが生じ，悪循環でエスカレートした例がたくさんあります。（とくに日本犬に多い）神経質な犬に対して，無理強いするような身体拘束は絶対にやってはいけません。

### 【2. リーダーになれる決まり事とは？】

出入り口は人間が先に立つ，散歩の時に前を歩かせない，犬の食事は人間のあと，人間と同じ高さ以上に登らせない，一緒に寝ない，引っ張りっこでは人間が勝って終わる，などを「飼い主がリーダーであることを認めさせる行為」としてこと細かに言う説がありますが，たとえば，散歩の時に引っ張らせ続けると癖になるというのは典型的な学習行動で

あって、リーダーシップにこじつけて考える必要はありません。犬と人間とが一緒に寝るのも、お互いにそれが好きならとくに禁止する必要もありません。場所に対する過剰な占有欲は、一緒に寝るかどうかとは全く別の問題です。このような形式的なこととリーダーシップとは直接の関係はないので、それぞれのお宅の生活スタイルで決めれば良いことです。

### 【3. リーダーの条件】

「認めさせる（＝押しつける）」のは支配・抑圧であって、リーダーシップとは「認められる」ものです。どのような態度がリーダーにふさわしいかは、ごく常識的に考えて良いものと思います。以下の項目はあくまでも個人的な見解ですが、人でも犬でも共通と思われるものを並べてみます。

- ・率先して新しい場면을展開させる
- ・その展開が仲間に利益をもたらす
- ・状況の変化に右往左往せず、落ち着いて対応する
- ・こわもての強さではなく、頼りがいのある強さを見せる
- ・ルールに忠実（要求に対して無原則な妥協はせず、自らもルールを犯さない）
- ・相手の態度によって動揺しない
- ・良し悪しをはっきりさせ、曖昧な部分を作らない
- ・自由意志に任せる機会も十分に作り、従わせる時との区別を明確にする

これを犬のトレーニングに当てはめれば、以下のようなことが考えられます。

- ・常に飼い主が新しい場면을展開させる
- ・良いことはすべて飼い主が与える（犬に理解できる形で）
- ・不測の事態に冷静に対処する（犬より先にびくりにしない）
- ・犬が求めること（散歩、遊び、食事、おやつなど）を犬の催促で始めない
- ・ルールを犬に理解できる形で示し、決めたことは要求に負けて妥協しない
- ・自分の犬に威嚇されてもびくびくしない／人や犬に勝手な攻撃行動を取らせない
- ・命令を出した限りは必ず実行させる
- ・命令ばかりせず、自由にさせる範囲や犬の意志を尊重する場面を作る

#### 【4. 無理な命令は出さない（聞けそうもないことは言いつけない）】

「号令を出す」ということは命令するということであって、願望を伝えることではありません。安易に発する号令は、命令に従わないという選択肢があることを学習させてしまいます。号令を出す時には状況をよく把握して、それを無視することが可能な状況なら、その犬のトレーニングのレベルをよく考えて無理なことは言いつけないで下さい。

呼びのトレーニングが十分でない犬を不用意に放してしまった場合、むやみに呼んではいけません。犬の様子を見て、言うことを聞けそうな時だけ号令を出して下さい。大抵の場合、呼びつけるよりは静かに近づいて距離を縮めてから「おすわり」などの号令で動きを止める方が成功しやすいものです。（決してこの時に叱ってはいけません）

「待て」のトレーニングが十分でない犬は、自由な状態で待たせてはいけません。すぐに動いてしまって何度もやり直しをさせるか、面倒になって放置する（＝不服従を黙認する）ことになり、いずれにしても非常に悪いトレーニングになってしまいます。その犬にとって自由な状態では待ち続けるのが難しいと思ったら、ケージの中で待たせるか、何かにリード（引き紐）を繋いで待たせなくてはいけません。

無理な号令は出さない。号令を出した限りは守らせる。これを徹底して下さい。このへんを曖昧にすることがリーダーシップにとって大きなマイナスになると考えられます。

#### 【5. 「下に見られているのでは？」と思ったら】

自然にリーダーシップが取れているのが理想ですが、それは日常の積み重ねによって現れる結果です。何か問題が生じている時に「リーダーシップを取らなくてはいけない」と焦るのは、かえって悪い結果をもたらします。言うことを聞かないということについて、リーダーシップという抽象的な概念で理解しようとするとう架空のストーリーを作り上げやすく、先述のように、不適切な対応によってわざわざ攻撃性を引き出してしまったりすることも多いものです。

また、「言うことを聞かない」ということを「飼い主に従わない」と考えれば、力づくで抑えつけたくなるかも知れませんが、「ルールを犬に理解させていない」と考えれば、より良い接し方やしつけ方に改善するきっかけになります。

不服従や反抗など、問題となっている行動があればその直接の原因を探り、シンプルに与える条件（接し方や飼育環境、生活ペースなど）を変えることで、無理なく行動を変化させて解決に至ることができます。

### 【1. 先住犬との関係について（多頭飼いの場合）】

多頭飼いは、後輩犬が先輩犬を見本として犬同士や家族のルールを学び、作業も見ながら学べるので、しつけや訓練が早く進む場合も多いようです。反面、人間に対して自立性の高い犬だと、犬同士の結びつきの方が強くなって、常に飼い主よりも先輩犬の方を向いて暮らすことになりがちです。一頭飼いから多頭飼いにしようとする場合には、このデメリットをよく認識しておいてください。

多頭飼いの場合、人為的に序列を作ろうと思ってもいずれ無理が来ますので、人間が工作しない方が良くと思います。同居犬どうしで喧嘩が始まった場合には、生命に関わるような異常事態でないかぎり仲裁に入らず、犬に任せておいてください。人情として、やられている犬をかばって強い方の犬を叱りたくなるかも知れませんが、そうすると弱い犬に人間が加担して実力以上の順位を与えることになり、群れの上下関係が非常に不安定になります。実力のない犬が優遇されている場合、嫉妬のために人間が見ていない時にリンチに合う可能性が高くなり、かえって争いの機会を増やします。基本的には年功序列で扱っておけば良いと思います。

ある程度のしつけが入るまでは、散歩は一頭ずつ行ってください。一人で何頭も連れていけば、問題行動（拾い食い、喧嘩売り、引っ張りなど）への機敏な対処ができず、肯定や否定の合図もどの犬に向けられているのか混乱し、トレーニングが進みません。また、家にいる時にも、いつでも一緒にさせておくよりも、時間を区切って犬どうしを触れ合わせてやることをお勧めします。「楽しいことや嬉しいことはすべて飼い主が与える」という感覚を作るために、仲間と遊ぶ時間は何らかの仕事のご褒美として与え、仲間との遊びを終わらせる時にはそれよりもっと楽しいこと（食事など）を用意して呼んでやれば良いと思います。

### 【2. 飼育場所について】

飼育場所は、家族との一体感を持ちながらも、普段はほどほどに退屈しているように設定して下さい。



外で飼う場合には、家のすぐ外でいつもお互いが見える場所に囲いか繋留場所を作って普通の居場所にして下さい。「屋根のないもうひとつの部屋」という感覚です。庭のすみに短い鎖で繋ぎっぱなしでは、飼い主との一体感は生まれず、犬の知能の大部分は他のことに向けられます。

室内飼いでは、人間と生活空間を共有するためコミュニケーションが取りやすくなりますが、いつも人間が側にいるので留守番の苦手な犬になりがちです。大した意味もなく話しかけていると、必要な呼びかけ（号令や指示）に対して鈍感になってしまうこともあります。どこでも自由に出入りさせるのではなく、犬が入れる範囲をある程度限定しておく方が良いと思います。また、室内飼いでは当然ながら暑さ寒さに対する抵抗力は弱くなります。ハードな野外活動に同伴するつもりであれば、屋外やテラスなどを普通の居住場所にした方が良いでしょう。

### 【3. 幼児との関係について】

お子さんと遊ばせる時には、子犬を乱暴に扱わないように、しつこくしすぎて子犬が疲れないように見守っててください。また、ある程度以上のトレーニングを入れようとする場合には、小さな子供から犬に命令させないでください。大人が犬に命令をしているのを見ると、子供も真似をして命令したがるものです。特に一人っ子や末っ子の場合、目下の存在ができたことが嬉しくて、遊び半分に意味もなく命令したり叱ったりしがちです。しかし、面白半分に号令を出すのはトレーニングとしては好ましいことではありません。小さな子供にとって、犬の教育効果を意識して号令を出すなどということは不可能ですから、トレーニングはなるべく子供から見えないところで行ってください。（見ていれば真似たくなるものです）犬に命令することを真似させるのではなく、ただ単純に犬と仲良く遊ぶことを教えて下さい。

### 【4. 叱る必要がないように環境を整える】

連れて来られたばかりの子犬はまだ新しい群れ（＝飼い主家族）になじんでいません。その段階で強く叱ったりすれば、家族から教育を受けたとは考えず、ただ恐怖感でいっぱいになってしまいます。可愛さのあまり家の中で自由にさせておいて、好ましくない場所に排泄したからと言って叱る、物をかじったからと言って叱る、などというのは、しつけとしての効果が薄いばかりでなく、飼い主との関係を築く上でもマイナスになります。

好奇心の強い子犬はあらゆることを試してみるものです。何でもできる環境にしておけば、あれもダメこれもダメとひっきりなしに叱っていることにはなりますが、子犬にとっていくつかの禁止事項を同時に覚えることは困難です。叱ったときに行動が止まったからと言って、本当にいけないことの意味を覚えたとは限りません。何度も同じことを繰り返すようなら意味が分かっていない証拠であり、そのうち叱られることに鈍感になってしまいます。それよりも叱る必要がないように、普段子犬がいる場所は何をされても困らないように環境を整えてください。徐々に自由にできる範囲を広げてやり、一度にひとつずつ禁止事項を教える方が効果的です。「失敗しない状況を作って成功の積み重ねで褒めながら教える」というのが、すべてのしつけやトレーニングの基本です。

#### 【5. 室内トイレのしつけ】

室内で飼う場合には、まずトイレのしつけが必要になります。前項でお話しした通り、室内を自由にさせてあちこちに排泄する習慣をつけてしまってから直そうとするのは、飼い主にとっても犬にとっても非常に大変なことで、犬種や個性によっては矯正不可能なこともあります。

不都合な場所で排泄をした時に叱ると、「人間の見ている前で排泄してはいけない」と解釈して、飼い主が見ていない隙を狙ってするか、目の届かない場所を選ぶようになりがちです。このような犬は粗相をした後で申し訳なさそうな顔をするようになり、「このコは分かっているのについ失敗してしまう」と思っている飼い主さんが多いようです。しかし、これは単に「申し訳なさそうな顔をすればひどく怒られずにすむ」ということを学習しただけです。本当に理解しているなら繰り返さないはずですが、“あやまり癖”がついている犬ほど、かならず再犯を繰り返しているものです。ルールを理解させるにはどうすれば良いかを考えましょう。

教えていないことはできません。どこで排泄したら良いのかを犬に理解させる前に、家の中で放し飼いにしてはいけません。普段の居場所をサークルの中に限定して、その中でハウス（寝床）、トイレ、リビングスペースを分けて下さい。子犬を迎えたばかりの時にはリビングスペースは無しで、ハウス以外の場所にはすべてトイレシートを敷きつめて下さい。最初は寝床以外のどこにでもおしっこをするかも知れませんが、次第に場所が決まってくるので、あまり排泄をしなくなった場所から徐々にトイレシートを外して下さい。残った部分のシートは、新しいものに交換する時にも古いシートを押しつけておしっ

この臭いをつけて下さい。シート以外の部分に排泄してしまった時には、すぐに拭き取って消臭スプレー（香りでごまかすものではなく臭いを分解するもの）をかけて下さい。

この段階になったら、きちんとシートの上で排泄をしている時に、タイミングを逃さずほめ言葉をかけ、排泄が終わったらすぐにご褒美のおやつを与えて下さい。それを続けていると、トイレシートでおしっこをした後、「ご褒美は？」と嬉しそうな顔をして飼い主を見るようになります。

確実に「トイレシートの上で排泄をするとご褒美がもらえる。それ以外の場所ですともらえない」というルールを犬が学習したら、排泄をした時によくほめて、見守っている状態で数分間だけ部屋の中に出して遊んであげて下さい。もちろん、その時にはいたずらされて困るようなものは片づけておいて下さい。長い時間出しておくと部屋の中に排泄してしまいますから、最初は10分未満でサークルの中に戻すようにして下さい。このようにして、「トイレシートの上で排泄をすると部屋に出して遊んでもらえる」ということを教えます。

部屋の中に出すのは、確実におしっこをしたことが確認できた時だけにして下さい。犬によってはへんな学習をしてしまって、出してもらうためにおしっこのポーズだけをする場合があります。膀胱が空になっていなければ部屋の中に排泄する可能性があります。排泄していない時に必要があってサークルから出す場合には、抱いたままで移動させるか、家の中でもリード（引き紐）をつけて移動させて下さい。

子犬はトイレシートで遊んでグシャグシャにしてしまうことが多いものです。新聞紙やティッシュペーパー、トイレシートなど、引っ掻いたり噛んだりすると簡単に破れるものは恰好のおもちゃになってしまいます。サークルの中にいつも入れておくものですから、いちいち見ている禁止することもできません。

トイレシートの上に金網（バーベキュー用の網など）を被せておけば簡単にいたずらを防げます。もし金網を嫌ってそこから外れたところで排泄をする場合には、サークル内のすべての場所（寝床を除く）に金網を被せて下さい。金網は小型犬になるほど目の細かいものを使って下さい。足が入るものだと金網があってもシートを掻き出してしまいます。

## 【6. 留守番に馴らす】

寂しがりな犬では、犬を長時間ひとりにしておくためには段階を踏んで徐々にトレーニングしなくてははいけません。最初は数分以内の外出（トレーニングのためだけの外出）に

留めてください。その際、外出の前後は犬に声をかけたりせず、視線も向けず、まるで犬がいないかのようにふるまってください。いつ出て行ったか分からないように何気なく外出し、帰った直後も犬の存在を無視してください。しばらくして落ち着いたら声をかけてあげましょう。そのようにして飼い主の外出に動揺しなくなってきたら、少しずつ離れている時間を延ばします。

寂しくて吠えるような場合、かならず吠えやむまで待って家に入ってください。吠えている時に戻れば「吠えたから飼い主が帰ってきた」と理解してますますエスカレートして行きます。最初は、食べるのに時間のかかるおやつやかじるおもちゃなどを与え、それに夢中になっているすきに出かけて、留守番に飽きないうちに戻ってください。

日本犬など自立心の高い犬では、最初から何の問題もなくひとりでいられる場合もあります。そのような犬には、むしろ、連れて行ってもらえるのか留守番なのか、はっきりと告げた方がストレスはたまらないようです。「バイバイ」とか「るすばん」などと言った指示語を決めておいて、外出する時やドライブ先で車に残しておく時などに声をかけると、すぐに状況を理解して静かに待つようになります。

寂しがりでも自立的でもない中間の性格の犬では、最初のうちは挨拶なしの外出トレーニングを繰り返し、ある程度大きくなってきたら留守番の合図（「バイバイ」など）を教えるようにするのが良いと思います。

## ～～～ 5 名前を大切に使う ～～～

### 【1. 名前の機能】

犬の名前には二つの機能があります。ひとつはアテンション（意識を向けさせる）の合図、もうひとつは人間同士が話題にする時の固有名詞です。純粋種の登録名はさらに別の機能です。通常はこれを意識する人は少ないですが、固有名詞と意識を向けさせる合図の二つの機能を分けて考えた方が効果的です。

アテンション用に「見て」などと言う号令を決めて、名前だけで振り向かない時に使うのもひとつの対策ですが、「ちゃんとこっちを向きなさい」というだめ押しの命令語を余分に作るのはあまり合理的ではないと思います。アテンションの機能を考えるなら、名前を呼ぶのは犬の意識を向けさせたい時だけに限定し、不用意に口にしないことです。意味

もなく呼びかけるのはもちろん、人間どうして話題にする時にも使わないことをお勧めします。（家庭では「うちの犬」、集合トレーニングでは「〇〇さんちのコ」などと言う）

## 【2. 二つの名前】

多頭飼いなどでは「うちの犬」の言葉は使えません。

そのような場合、アテンションの合図としての名前を大切に使って、人間どうして話題にする時の愛称を別に決めておくという方法をお勧めします。学校の先生に生徒が陰であだ名をつけるようなもので、たとえば名前を「クロ」、愛称を「ちび」にして、トレーニングの時には「クロ」と呼びかけ、話題にする時には「ちびはもう寝た？」などと使い分けます。次第に「ちび」も自分に関係がありそうだと感じるようになりますが、「何か？」という程度の鈍い反応です。これに対して、「クロ」という言葉を聞けば、たとえ熟睡していても耳をピクッと動かし、シャキッと起きるようになります。最初はめんどろで戸惑うかも知れませんが、慣れれば自然に使い分けられるようになり、その効果は絶大です。

どうしてもひとつの名前を使うしかない場合には、人間どうして話題にする時には、犬に呼びかける時とイントネーションを全く変えて、会話の中で際立たないようにして下さい。

## 【3. アテンション機能を意識して使う】

子犬などのトレーニング開始時点では、名前を呼べば寄ってくるだけで十分ですが、次第に名前を呼ばれることは「自分に対して新しい展開がある」という意味で理解させるようにして行きます。

犬が他のことに意識を向けている時をねらって、ふいに名前を呼んでボールを投げる、名前を振り向いたら号令をかけておやつを与える、などのトレーニングをします。これを毎日続ければ、名前に対する感受性が鋭くなります。

もうひとつのお勧めは、食事を与える時、許可のコマンドを出す前にささやくように名前を呼ぶことです。「待て」・・・「クロ、食べて」という具合です。名前から許可のコマンドまでの時間はごく短くて結構ですが、いつも全く同じだと「食べて」の指示がなくてもタイミングを図って勝手に食べるようになるので、0秒から数秒まで毎回ランダムに変えてください。これは子犬を迎えた時から一生続けて良いと思います。

#### 【4. 名前で叱らない】

「クロッ！！」などと声を荒くして怒鳴るような、名前そのもので脅すことをやってはいけません。名前というのはその犬にとって良い印象の音でなければいけません。不都合な行動に対しては、名前を呼ぶのではなく禁止の言葉を与えるか、工夫して“天罰”を与えるようにして下さい。

### ～～～ 6 重要なほめ言葉 ～～～

「うちのコはほめても嬉しそうな顔をしない」というご相談を受けることがあります。一緒に暮らしていれば、いずれは自然にほめられていることを理解してくれるようになりますが、意識的に言葉と「快」の感覚が一体になるように教えることで、よりほめ言葉の効果を上げることができます。

#### 【1. ほめ言葉は優しく】

ほめ言葉をかける時は明るい声と優しい表情を意識して下さい。「ご褒美がもらえる合図」としての機能を考えれば、声のトーンや表情は任意のもので良いこととなりますが、ヒトとイヌとはお互いの喜怒哀楽が読めるので、明るい声や表情そのものが犬にとって心地良さを与えます。日本の中高年の男性は「人前で犬ごときに優しい声を出すのはみっともない」という感覚の人が多く、仏頂面をしたまま偉そうに「よ～し」と言うような人がいますが、これでは犬もいい気持ちになれるわけがありません。いかにしたら言葉だけで犬がいい気分になれるかを工夫してください。

基本的には、犬が甘えたり寂しがったする時の、キューキューという高いトーンに近づければ良いのですが、鋭く甲高い声が良いか、ふわっとした優しい声が良いかは、犬の性格や状況によって違ってきます。

#### 【2. 習慣づけで教える】

ほめ言葉をひとつに決めて、餌を食べている時、なでてやっている時など、犬にとって嬉しい時や気持ち良い時に常に声をかけて下さい。たとえば「よし」をほめ言葉にするな

ら、「快」の感覚がある時に常に「よし」「よしよし」という言葉を聞かせ続けることによって、逆に「よし」の言葉で「快」の感情を呼び起こすことができるようになります。「よし」という言葉だけで尻尾が動くようになれば成功です。

### 【3. ご褒美を使って教える】

気長に習慣づけるのではなく、もっと短期間にほめ言葉を教えたい場合には、名前などを呼んでこちらに注意を向けさせておいて、食べ物の小片を数粒握って自分の顔の近くに掲げ、犬が視線を合わせた瞬間に「よし」と言いながら1粒与えて下さい。

最初は言葉1回でおやつ1個。「よし、パク。よし、パク。よし、パク」という感じに繰り返します。ほとんどの犬では、数回～十数回続ければ、「よし」と言った途端に期待した表情になると思いますので、次第に「よし、よし、よし、」と繰り返して視線をしばらく集中させた後でおやつを出すようにして行きます。（いきなり集中が途切れるほど長くしてはいけません）

これはほめ言葉を教えるだけではなく、アイコンタクトのトレーニングも兼ねたものですが、気の弱い犬では、じっと見つめられると目を逸らしてしまうことがあります。このような犬では、一瞬視線が合った瞬間にほめ、それ以上見つめ続けなくてあげて下さい。アイコンタクトのトレーニングも、犬の性格を見ながら、決して嫌な印象を与えずに無理なく進めて下さい。

### 【4. 良い行動はすべてほめる】

「よしよし」の言葉の意味を十分に覚えたら、日常生活のあらゆる場面で促進したい行動を逃さずに「よしよし」の声をかけるようにします。号令に従った時にほめてやるのはもちろん、自由にさせていて好ましい行動を自発した時にも（何もせずにおとなしくしていることも含む）、タイミングを逃さずに声をかけるようにしてください。

日常生活では、とかく困った行動をした時ばかり注目して、良い行動をした時には特に関心を払わない、という対応になりがちですが、不都合なことをしていないということはすなわち望ましい状態なのですから、放置せずにほめ言葉をかけ、「それでいいんだよ」と行動を肯定してあげましょう。慣れれば自然に声が出てくるものです。そして、何回かに一回は「よしよし」の言葉とともにご褒美（おやつ、なでる、等）を与えてください。それがないと、せっかくの望ましい行動を定着させることも増やすこともできず、むしろ

望ましい行動を消去して行く結果になります。これは非常に重要なことですので、犬と接する際には常に意識して下さい。

次第に、ご褒美がもらえるから嬉しいというだけではなく、自分の行為が飼い主から肯定されている、ということを理解するようになり、ほめられるだけでもある程度の満足感を持ってくれるようになります。叱られてばかりいれば萎縮して行動が減り、頻繁にほめられていれば自発行動が増えます。

知人の犬で、おすわりさえ教えていないのに、外出先でもいたって行儀の良い犬がいます。別の犬で、落とし物拾いやドア閉めなど、号令を出してもいないのに先回りして手伝ってくれる犬もいます。一貫した基準をもって機会あるたびにほめていけば、いつしかその基準を理解して、初めての場面でも自然に飼い主の意に沿う行動をしてくれるようになるものです。

#### 【5. 語調にバリエーションをつける】

だんだんとほめ言葉の語調にもバリエーションをつけ、静かにほめてやる場合、がんばるように励ましてやる場合、それが正解、と承認してやる場合など、いろいろ使い分けて行きます。

「待て」や「伏せ」を命じた時には、静かにしていることをほめてやるわけですから、落ち着いた口調で「よ～し・・・」などとなだめるように褒めてください。言葉とともに撫でてやる時には、子供を寝かせる時のように優しくゆっくりと撫でてください。臆病な犬を雑踏の中に連れ出したり、障害物の通過を教えたりする時には、気分を高揚させるように「よしよし！よしよし！」と煽りながら励ますようにほめてください。撫でてやる時には、手を早く動かしたり軽くポンポンと叩いたりしてテンションを上げてやります。鎮静的なほめと興奮的なほめをうまく使い分けてください。興奮しやすい犬はなだめるようなほめ方を多用し、臆病な犬やのんびりしている犬には煽るようなほめ方を多用することになります。

新しい動作を教える時や方向を指示した時など、「それが正解だ」と教えてやる時にはその瞬間を逃さずに「よしっ！」と短くきっぱりと承認してください。だら～っと間延びしたほめ方をすると、何をほめられたのか犬が理解しにくくなります。「おりこうさん」とか「いいこだね」というような長めの言葉をほめ言葉にして、すでに定着している場合には、「そう！おりこうさん」というように、短い承認の言葉を決めて、ほめ言葉の語頭



につけてやると良いと思います。

普段何気なくこちらを見た時や、散歩をしながら「行っていい？」という感じでお伺いを立てた時などには、軽く「よしよし」とほめながらうなずいて、「そうしていいよ」と行動を承認してあげましょう。

## ～～～ 7 叱る時の注意 ～～～

### 【1. 叱り方四原則】

犬が野生状態なら、いろいろな失敗をしながら獲物を捕ることや快適に生活する方法を学習して行くはずで、適切な行動を取れば獲物にありつけ、不適切な行動をすれば逃げられてしまいます。また、行動中に不注意で痛い目に会うかも知れません。このようにして、報酬に結びつく行動は強化され、報酬が得られなかったり不快な思いをした行動は抑制されるようになります。飼い犬の場合にも同じように、報酬を与えない、もしくは不快な思いをさせる、ということで人間が望まない行動を抑制することができます。ただし、これにはいくつかの注意が必要で、間違ったやり方をすると悪影響だけが残ります。

まず第一にタイミングが重要です。叱る時は、その行為をした直後でなければいけません。後になってから叱っても、犬にとっては何のことか分からず、教育的な効果は全くありません。理想的には、行為をしてからよりも、その行為をしようと犬が考えた瞬間に叱るのがベストです。

第二に頻度の問題です。ある行為を禁止するのであれば、それに対してできるかぎり例外なく罰が与えられなくてはなりません。叱ったり黙認したりでは犬が混乱してルールが理解できません。

第三に強さです。罰の強さはその行動を一発で止めるだけの力を持っていないではいけません。効果のない叱り方を繰り返して、「何度同じことを言わせるの？ 今度やったら本当に怒るよ！」というような脅しは全く逆効果です。犬には先の約束は理解できませんし、効果の薄い叱り方は叱ることに対する耐性を作ってしまう。逆に、罰が強すぎて過剰に萎縮させてしまうのもよくありません。その犬の感受性をよく見極めなければいけません。

第四は飼い主との関係です。叱ることの目的は、進行中の行動を止め、かつその行動を

繰り返させないことです。決して犬を畏怖させることが目的ではありません。そのへんをよく自覚していないと、本来の目的が一向に達成されないのに“ごめんなさい”のしぐさ（詳細は後述）ばかりを強化してしまったり、飼い主に対して反感や不信感をつのらせてしまうことになります。叱ったり制止したりする時には、決して感情的にならないのはもちろんですが、対立感を抱かせないように配慮してください。叱ることで飼い主に対する対立感を持たせてしまうようなら、たとえ一時的に行動が止まったとしても、後で悪影響が出ます。少しでもそのような傾向が見られたなら、叱ることを一切やめ、別の対応を考えて下さい。

「即時的に」「例外なく」「必要十分な強さで」「対立感を抱かせずに」というのが叱り方の四原則です。

## 【2. 誤解を招くような叱り方はしない】

利口な犬だと、禁止事項も一度だけ叱れば覚えてくれるので、つい人間と同じような感覚になって犬に理解不能な叱り方をしてしまうことがあります。そうすると、場合によっては全く別のことを叱られたと解釈して、一生直らない困った癖をつけてしまうことがあります。敏感で頭の良い犬ほどこのような失敗が起こりがちですので注意してください。持来欲の強くない犬に対して、何かをくわえて遊んでいる時に無闇に叱ると、一生「持って来い」をしなくなってしまうことがあります。また、不都合な場所でおしっこをした時に叱ると、「見られている前ではおしっこをしてはいけない」と解釈して、飼い主の見えない場所を探してはおしっこをするようになってしまう犬もいます。

どんなに利口な犬でも言語的な意味での理解能力はなく、論理的な推論もできません。現行犯でない事柄を叱ったり、どういう行動について禁止されているのか分からないような叱り方は絶対にしないでください。いつもは認めているが今日はお客さんが来るからだめ、というような前提条件付きの禁止も理解できません。何か他のことを叱られたと解釈してしまいます。

## 【3. なだめ行動と「反省」とは違う】

「留守中にいたずらをしていた時には帰ってから叱っているが、うちのコは何を叱られたのかちゃんと分かる」という人がいます。時間が経ってから叱っても理解できる、という主張です。これは犬の“ごめんなさい”のしぐさ（なだめ行動）を反省の表れと誤解し

ているにすぎません。留守をして帰ってみると犬がシュンとしている。見回すと部屋が散らかっている。きっと退屈のあまりいたずらをしてしまったものの、悪いことをした、と反省しているのだろう、と解釈して、「この次は絶対こういうことをするんじゃないよ」と説得する。こういう例は非常に多いと思います。しかし、さきほど説明したように、犬は現行犯以外のことを叱られても理解できません。反省しているのではなく、「散らかった部屋に飼い主が入ってくると叱られる」と考えてなだめ行動に出ているだけなのです。本当に叱られた内容が理解できているのなら同じ行為は繰り返さないはずですが、このような犬は必ず再犯を繰り返しているものです。留守中のいたずらを「反省している」ように見える犬に対して、試しに、飼い主が部屋を散らかして出て行って、数分後に帰ってみてください。自分がしたことでもないのにシュンとしているはずです。

どんなことでも、へんに“あやまりぐせ”のついている犬ほど、いつまで経っても再犯を繰り返すものです。

#### 【4. できる限り叱る機会を作らない】

「家族のなかに迎え入れる」の項でもお話しした通り、叱らなくてはいけないような状況はなるべく作らないようにして、ひとつずつ禁止事項を教えてください。いつも叱ってばかりいると、萎縮して自発行動の少ないつまらない犬になってしまうか、逆に叱られることに馴れきって常に怒り声を上げなくてはいけない犬になってしまいます。叱る機会が生じてしまったというのは、トレーニングとしては失敗です。でも、実際の生活ではどうしてもそのような場面が出てくるものです。1回叱ったらその10倍ほめる機会を作ってあげてください。その代わりに、叱ったことについては絶対に繰り返させないつもりできっぱりと対処してください。

### ～～～ 8 具体的な叱り方 ～～～

#### 【1. 言葉で叱る・禁止する】

不都合なことをした時に声と表情で叱る、というのはほとんどの飼い主は意識せずともやっていますが、効果的に実行できなければ意味がありません。飼い主は叱っているつもりでも、早口の甲高い声で「だめだめだめ～！」などと言うのでは、犬は叱られたとは認

識せず、かえって興奮してしまうものです。

犬は合図としての言葉を覚えるだけで、言語そのものを理解するわけではありません。禁止の号令を有効にするには、言葉だけで言うことを聞かせようとするのではなく、まず禁止の言葉（号令）の意味を教えるトレーニングが必要です。

「だめ」という言葉を禁止の合図にするなら、「だめ」と言った直後に次のいずれかの対応をして下さい。

- 1) やろうとしている行動を物理的に不可能にする
- 2) 遊びを中止する、ご褒美を与えない
- 3) 適度な罰（嫌な刺激）を与える

例えば、散歩中に花壇に入りそうになったら「だめ」と言うのと同時にリードで動きを封じてしまう、というのが1)です。食事やおやつを与えようとした時に飛びつく場合、飛びついた途端に「だめ」と言って食事やおやつを中止してしまうというのが2)です。足元でじゅうたんを掘り始めたような時に「だめ」と言って床を強く踏み鳴らす、というのが3)です。（以上は一例に過ぎません）

放れていて不都合なことをしている時には、悟られないように持ち物を高く放り投げ、投げた物が床や地面に落ちる寸前に「だめ」などの言葉をかけるという手段もあります。言葉の直後に何か降ってくるので、「放れていても飼い主の手の内にいる」という認識ができます。これを何度か経験すれば、言葉と嫌なことが結びつき、禁止の言葉をかけただけで行動が止まるようになります。ただし、過剰な刺激を与えると恐怖感のあまり別の行動を誘発してしまうことがあるので、個々の犬の感受性をよく見極めて行って下さい。

この禁止の号令を教えるトレーニングでは、大きな声を上げて言葉だけで脅すことのないよう、きっぱりした口調でありながらも、犬に認識できるかぎり小さな声でおこなってください。大きな声でトレーニングしていると、いざという時にはそれよりもっと大きな声を出さなければ言うことを聞かなくなり、街なかで通行人に振り返られることとなります。

叱って行動が止まったらそのまま放置せず、かならず承認のほめ言葉をかけ、時によってはご褒美も与えてください。やりたかった行動を中断するということは負担の大きな作業なので、それに対してもきちんと承認と報酬を与えることが必要です。そうすることで、禁止の言葉に過剰な嫌悪感を持たせずにすみます。くれぐれも「叱りっぱなし」

にならないように気をつけてください。

文章でくどくどと叱っている人をよく見かけますが、これは効果が低いばかりかかえって学習を遅らせます。犬は合図として単語を覚えることはできても、文章を理解する能力はありません。「いけない」ということだけを伝えれば良いのであって、「なぜいけないのか」を説得しようとしても全く意味はありません。不都合な行為が止まった後まで叱り続けることで、かえって何を叱られたのか理解しにくくなってしまいます。何を伝えたいのか人間本位で考えるのではなく、どうすれば犬に理解できるのかを常に意識してください。

## 【2. 天罰（人間の関与を感じさせずに嫌な刺激を与える）】

禁止の言葉に従うトレーニングだけでは、人間が側にいる時にしか行動を抑制できません。人間の存在とは無関係にやめさせたい行動は、禁止の言葉を発することなく、特定の行動の直後に必ず嫌なことが起こるようにしてください。人間の関与を一切感じさせないで罰（嫌な刺激）を与えるのがコツです。

たとえば無駄吠えをしている時に、大きな音のする物を犬に気付かれないように投げつけて「吠えていると上から嫌なものが降ってくる」と思わせれば、吠える行動は減少して行きます。犬に向かって投げるのではなく、上から落ちてくるように、できれば犬のすぐ向こう側に落ちるように投げるのがコツです。屋外では鎖や数個の硬貨を入れた缶など、地面に落ちた時に大きな音の出るものが効果的ですが、とっさの時には、ポケットの中の硬貨でも排便拾い用のバッグでも、手元にあるものを何でも活用してください。室内ではペットボトルに硬貨を入れたものなど、落ちて家具が傷つかないものを工夫してください。人間の作為を感じさせずに“天罰”を与える方法はいくらでも考えられます。入ってはいけない場所には、足を踏み入れると物が倒れてくるなどのトラップを仕掛けるのも良いと思います。必要に応じて、その状況に合った方法を工夫してください。

## 【3. 無視する】

じゃれ噛みなどをしてきた途端に接触を絶って無視をしてしまう、という手法があります。繋ぎ飼いやサークル飼いなど居場所が限定されている場合には、悪ふざけをしたらその場からすぐに立ち去ってしまっても、5分～10分経ってから戻って下さい。犬が自由になっている場合には、一切のリアクションを取らず、振り払ったり叱ったりもせずただ

じっと固まって根比べをして下さい。視線も向けてはいけません。そして、その行動をやめた瞬間にほめてやります。不適切な行動には反応せず、適切な行動をした時にだけプラスの反応をしてやるわけです。

甘えの無駄吠えがなかなか直らない場合にもこの方法が有効です。誰かにかまって欲しくて無駄吠えをしたり、何かを要求して吠える場合には、近寄って叱ることがかえってご褒美になってしまいます。叱った時は吠え止んでも、その場を離ればさらに強く吠えるようになります。叱ってやめさせているつもりが結果として無駄吠えをますます助長するようなことにならないよう、多少うるさくても一切無視した方が解決につながります。無視する時間は無闇に長くする必要はなく、吠えなくなって落ち着いた時にほめて下さい。

悪ふざけや要求吠えはコミュニケーションを求めているわけですから、その場を離れたりリアクションを取らないことは「罰」になります。しかし、犬に近づいたら唸った、号令を出したのに言うことを聞かなかった、というような場合は、犬の方からコミュニケーションを拒否しているのですから、その場を離れることはご褒美を与えることになり、犬の要求に人間が従ったことになります。「無視」（タイムアウト）という手法を万能のように言う人もいますが、これも用途を間違えると逆効果になってしまいます。有効な場面かどうか正しく判断して実行してください。

#### 【4. 別の行動に置き換える】

行動を抑制することばかり考えず、不都合な行動と両立できない別の行動をさせてしまう、という手段は極めて有効です。何をしてはいけないか（何をすると叱られるのか）という禁止事項だけを教えるよりも、何をすれば良いのか（何をすればほめられるのか）という対案をセットで示してやる方が受け入れやすいものです。

敵意がなく、接触を求める遊び（飛びつき、じゃれ噛み、マウンティングなど）では、「飛びついたら後足を踏む」「噛んだらマズルをつかんで叱る」などと指導する人がいますが、中途半端な苦痛を与えると、格闘ごっここの相手をしてきていると思ってなおさらエスカレートするものです。かと言って、せっかく飼い主に好意を持って近づいているのに、抵抗できないほど強く押さえつけて叱るのは、家庭犬のしつけとしては好ましくありません。とくに自立性の高い犬では、心理的な距離を作るものになってしまいます。

じゃれて噛んだら「痛いっ！」と大げさに痛がって見せ、「だめ」で禁止、「なめて」などと言って手をなめさせる。（普段、手をなめてくるときに「なめて」などと言って言

葉を覚えさせておく) 飛びつこうとしたらすかさず言葉で制止し、「おすわり」で足元に座らせて撫でてやる、という具合にトレーニングを続ければ、飼い主に構って欲しい時には側にきて座ったり手をなめたりするようになります。どのような行動に置き換えるかは飼い主の好みですが、遠ざけるような命令ではなく、接触欲求を満たしてやるような命令にして下さい。

狩猟欲のある犬は子犬の時にはかならず格闘ごっこをして遊ぶものです。時にはじゃれっこの相手をしてやることも必要です。ただし、遊びの始めと終わりのタイミングは飼い主が決めて、じゃれて良い時といけない時の区別をはっきりさせてください。じゃれっこをする時に噛みつかせるおもちゃ(タオルや軍手、太いロープなどでも良い)をひとつに決めておくのが良いと思います。「引っ張りっこ遊びは必ず人間が勝って終わるように」と指導する人がいますが、力づくで取り上げて終わるとむしろ対抗意識を煽ってしまいます。それよりは「おしまい」「わたせ」などの命令で犬の方から自主的に出させて終わるような習慣にした方が良いと思います。そのためには食べ物と交換して出させるのが良いと思います。最初は「わたせ」「ちょうだい」などの号令で毎回食べ物と交換してやり、次第に食べ物を与える頻度を減らして行きます。

特定の刺激に対して問題行動を起こす時にも、この「別の行動を習慣づけてしまう」という手法が有効になります。チャイムが鳴ると玄関に走って吠え立てる場合、チャイムを鳴らして玄関から一番遠い場所で食事を与えるトレーニングが有効です。

## 【5. チョーク】

首輪とリードをつけている時に、瞬間的にリードを引いてショックを与える方法があります。チョーク(英語ではジャーク)と言われる方法で、ショックを与えれば苦痛による罰になり、その手前で止めておけば信号による警告になります。この手法を多用する流儀では、チョークチェーンと言われる鎖の引き締め首輪が使われます。

これは罰としての効果は大きいものの、むやみに使うと、リードに対して「叱られる道具」として嫌な印象を持ってしまう恐れがあり、また、頻繁に苦痛を与えることでかえって反抗心を助長している例も多々見られます。使うのは本能的・衝動的な行動を抑制する時だけに限定して、天罰に近い形で、飼い主の関与を感じさせる前に行動を止める必要があります。

たとえば、散歩中に落ちているものを食べようとした瞬間、一瞬だけ素早くリードを引

いて、見えない壁にぶつかったかのように思わせ、犬が戸惑ったら「ん？どうしたの？」ととぼけていて下さい。何度かこの経験をすれば、落ちている食べ物を見つけてもすぐには口をつけず、どうしようかと葛藤を見せるはずです。その機を逃さずに大げさにほめて、とびきりの好物を与えてください。不都合なことをしそうになった瞬間に、こちらの動作を犬に読まれないようにして物理的に静止し、行動が止まったらすぐにほめてやるのが肝心です。

いずれにせよ、瞬間的に効かせた後はすぐ解除しなければ意味がありません。持続的に首を締めながら叱り声をあげている例をよく見かけますが、それではかえって悪影響だけが残ります。とくにチョークチェーンについては、自己流で使用するのは絶対にやめてください。「引っ張ると首がしまつて苦しいのでお散歩が楽になる」という間違った考えで使用している人がいますが、チョークカラーで持続的に首を締めていると体にも悪影響が出ます。

また、ちょっと気が散っている、号令にすぐ従わない、という程度でチョークをかけている人がいますが、とりあえずそれで犬が従うために慢性化して行くものです。まるで中毒のように飼い主も犬もそれが癖になって、飼い主はほんのちょっとしたことで反射的にピッピッとショックをかけ、犬もそれに慣れて、ショックが入ってから言うことを聞くようになります。そして、リードをつけていない時にはいうことを聞かなくなってしまう。犬の訓練にはいろいろな流儀があるので一概には言えませんが、一般の飼い主では、ほかにトレーニング方法がない場合以外、チョークの濫用は控えた方が良いでしょう。

## 【6. 体罰】

「反抗する犬には痛い思いをさせなければいけない」「いけないことをはっきり教えるためには体罰も必要」「大型犬に対しては体罰は避けて通れない」等々という意見がありますが、これには同意できません。叱る際にも基本的に直接罰（殴る、蹴る、物で叩く、等）は用いるべきではありません。

気の強い犬、大きな犬に対してより強い力で屈伏させながら言うことを聞かせる、という考え方は、犬に対して「力こそが上下関係」と教えていることになります。こういう育て方をされている犬は、普段は従順なようでも突然反抗したり、主人には従っても家族の中の弱い者を攻撃したりする危険が高くなります。また、臆病で噛む犬に対して体罰を与えた場合、人間の手に対する恐怖心をますます増幅させてしまうため、近づく人間を片



端から噛むような犬にしてしまいます。仮に体罰方針で表面上うまくしつけられたとしても、いつ叩かれるのかとびくびくしながら行動を抑制する卑屈な犬になってしまいます。こういうしつけ方をされている犬は、そばで手を上げただけで首をすくめて目をしばたかせるのですぐ分かります。

しつけの本の中には、体にダメージを与えずに体罰を与えるためとして、犬の体のこの部分を叩きなさい、新聞紙を丸めたものを作って叩きなさい、などと図示しているものがあります。しかし、新聞紙で叩けば新聞紙を持っただけで逃避反応や攻撃反応を起こすようになり、手で叩けば人間の手を嫌う原因になります。リードの先端でピシッと打てという人もいますが、訓練士などのプロでもないかぎり、一般の方では犬との関係を悪くするだけです。慢性的な体罰からは信頼関係による良い主従関係は生まれません。

欧米流の叱り方として、頬の毛を両手でつかみ上げて睨みつけるとか、マズルを握って叱るということを勧める人もいます。これは体罰とは言えないまでも、人間の手が向かって行って罰を与えるという点では同じことです。この叱り方でかえって噛みつきを誘発してしまった事例が数多くあります。「人の手は心地良さを与えてくれるもの」という感覚を崩すようなことをしてはいけません。

歯を剥くほど攻撃的ではないものの、唸って不満の意思表示をするような時には、決して怯まず、かと言って過剰に反応することなく、静かな気迫をもって対処してください。全く関知しないふりをするか、ふんとせせら笑うようなつもりで低く一喝してください。

なお、犬によっては、生後半年前後の反抗期やすっかりおとなの風格が出てくる年齢を中心に、飼い主を試すように威嚇や攻撃をしかけてくる場合があります。このような場合、ごく例外的に、他のどの手段よりも直接罰が有効になる状況があり、以前は「一生に一度だけのおしっこちびりの儀式」としてこの文章に記載してありました。しかし、何人かの方から「うまく行かない」というご相談を受け、状況を伺ってみると、この項の本質を全く理解せず一発逆転の安易な手段として体罰を使用していました。しつこいようですが、力づくで従えようとするのは百害あって一利なしです。誤解を招かないよう、具体的な記述は削除しました。ただし、いかなる手段も相対的なものであり、通常は有害なものでも場面や使用方法によってごく例外的には特効的になることもある、ということを申し添えておきます。

## 【7. 同じレベルでの対決をしない（拾い食いの例から）】

拾い食いに対しては、口をつける前に「見えない壁」を意識させるのが最も効果的です。しかし、現実的には、なかなかそのタイミングを捕らえることができず、何かを口にしてから気付くことが多くて苦労するものです。

昔、わが家の犬も拾い食いで大いに悩んだ時期がありました。その当時、市販の指導書ではどの本にも「拾い食いをしたら口の中に指を入れて掻き出して叱りなさい」と書いてあったので実行したところ、逆にどんどん依怙地になり、叱られる雰囲気を感じるとぐっと歯を食いしばって口を閉ざすようになってしまいました。強く叱るほど我慢比べのようになって行きました。ところが、妻が散歩させている時に拾い食いをした場合は、「何食べたの？見せてごらん」と言うのが割合簡単に口を開いて見せるのです。自我のはっきりした頑固な犬に対しては、犬の欲求と真っ向から対立するような命令は反発を招いてしまうようです。

このことに気づいてから、好きな食べ物（牛筋の干物など固いもの）を投げて持って来させて、一旦こちらの手に渡させてから与える、という練習を繰り返しました。そして、何かを拾った時にはむやみに禁止や叱責を与えず、まず「待て」「おすわり」で行動を止め、何ら厳しい表情を出さずに歩み寄って「わたして」で出させて、いけないものの時は鼻先に押しつけながら「だめでしょ」と言って軽く叱り、まつぼっくりや小枝などで遊んでいただけの時は「はい、いいよ」と言って笑いかけながら犬に返してやるようにしました。その結果、禁止されそうな物に対しては、たとえ興味を持って近づいても、こちらの顔を振り返ってお伺いを立てるようになり、軽く「だめ」と言えば諦めるようになりました。

また、知人の飼っている雌の柴犬の例ですが、子犬の頃に散歩中の拾い食いがひどく、やはり口に手をつこんで飲み込まれる前に取り出そうとしていたそうです。すると、抵抗して歯をむき出して唸って怒り、くわえた物を10分くらいは離さない。声をはりあげて叱って、やっと取り出しても歩き出すとまた何か見つけてくわえる、ということを繰り返していたそうです。しかし、家の中でまで拾い食いをした時、ついに飼い主がキレて烈火のごとく怒りました。するとその犬は恐怖のあまりおしっこをちびってしまい、その時を境にピタッと態度が変わりました。それ以来、何かを口に入れた時には、目や口調で注意すればおずおず自分から出すようになり、次第に拾い食い自体も自然消滅したということです。

頑固な犬にとって、力比べで言うことを聞かせようとすればますます依怙地になって、

かえって犬と人間とが同じレベルでのケンカになってしまいます。そのような対立は極力避け、犬が自主的に言うことを聞くような心理状態を作ることが大事です。そのためには、抵抗感の少ない指示から順に与えて最終的に犬の欲求と正反対の行動を取らせてしまう方法もあり、知人の柴犬のように、圧倒的な罰によって物をくわえる意欲を消失させる方法もある、ということです。

「叱りながらくわえているものを取り上げる」「口の中に手を入れて掻き出す」という対応は、むしろ攻撃性を引き出して危険な犬にしてしまうことが多いので、絶対にやってはいけません。このことに限らず、正面对決（同じレベルでのケンカ）によって言うことを聞かせようとするのは、人間と犬との関係を悪化させるだけなので避けて下さい。

## ～～～ 9 食事の与え方 ～～～

### 【1. 食事中の警戒心を抑える】

食器に餌を入れ、許可したあとはそのまま立ち去ってしまう、という食事のさせ方をしていると、警戒心や独占欲が強い犬の場合、食事中に人が近づくと唸ったり歯を剥いたりして威嚇するようになることがあります。このようなタイプの犬では、普段はどんなに従順に触らせていても、食べている時だけはまた別の警戒心が働くようです。いかなる場合でも飼い主を威嚇するような行為を許すべきではありませんから、こうさせないためには、小さな頃から飼い主が食器を持ったまま与え、時々は食事中に餌を追加して入れてやるようにするのが良いと思います。犬の食事時間などわずか5分程度のものですから、成犬になってからもずっと続けてください。

食事中に唸る犬の矯正方法として、「食べている最中に食器を取り上げてしまう」とか「餌を手でかき回して、唸ったらマズルをつかんで叱る」などと指導する人がいますが、わざと嫌がることをして反抗したら叱る、というやり方はかえって性格を荒らしてしまう危険性が高く、賛成できません。このことに限らず、飼い主は嫌なことをしない、飼い主の手は心地良い、ということを徹底して信頼させる方が良いと思います。信頼感を損なうような無意味な意地悪をしてはいけません。

### 【2. 抱きながら食事をさせる】

もっと手をかけるなら、抱きながら餌を与えるのが一番だと思います。わが家では、子犬の頃は片手で抱きながらもう一方の手に食器を持って与え、大きくなってからは人間が座った足の上で横向きにオスワリの体勢をとらせて、片手で食器を持ち、片手で犬の体を抱え込むようにして食べさせています。「愛玩犬種じゃあるまいし、抱っこしてお食事なんて」と言う人もいますが、溺愛のためではなく、人間の懐の中で食事をさせることによって、飼い主への警戒心を最小限に抑えることができるからです。以前飼った雄の甲斐犬は、普段はとてもおとなしくてよく言うことを聞くのに、食事の時だけは近づいただけで唸るようになってしまい、矯正に苦労しました。現在の犬も生後70日で食事中に唸って噛みついたため、抱きながら食事をとらせることを考えて実行し、非常に効果を上げています。

もし、飼っている犬がすでに食事中に唸ったり歯を剥いて齧ったりするようであれば、次の順序で徐々にならしてください。

- 1) 食器を手を持って与える
- 2) 餌を小分けして食器が空になる前に追加してやる
- 3) 食べている最中に「待て」をかけてから追加してやる
- 4) 先に犬の体に手を触れて、その状態のまま餌を持ってきて食べさせる
- 5) 食べている最中に触れている手を動かして撫でる

この場合にも決して先を急がずに、緊張感がなくなってから次の段階に進み、もし少しでも唸るようなら、前の段階に戻ってしばらく続けてから再度試みてください。

### 【3. 硬い食べ物を持ったまま齧らせる】

また、独占欲を低下させるには、硬い食べ物を手に持ったまま少しずつ齧らせてやるのも有効です。（不安があれば革手袋を使用して下さい） その際には決して奪い取られないようにしっかりと持って、もし唸ったり力づくで奪い取ろうとしたら、その時点で、餌を持ったまま何も言わずに立ち去ってしまってください。食べている最中に中断させられること自体が強い罰ですから一切叱る必要はありません。手に持っている部分だけになった時、無理に取ろうとしたら指ごと齧ろうとしたらやはり立ち去ってしまいます。困ったような顔をして口を離れた時だけ「どうぞ」とか「食べて」などと言って最後の一口を与えてやります。

このトレーニングを十分に重ねたら、半分くらい食べた時に「待て」をかけてから新し

いものと取り替えてやったり，硬い食べ物を使って「持って来い」をさせてから与えたりして，「一旦飼い主に渡しても必ず食べさせてもらえる」ということを教えて行きます。

#### 【4. 食器を使わずに手からだけ与える】

ビーグルやレトリバーなどは，どんな状況でも食べ物を出せば喜んでくれる犬がほとんどですが，日本犬などでは，どんなにお腹がすいていても慣れない場所に行くとオヤツを食べなくなってしまうことがあります。しつけ教室で，無理やりオヤツを押しつけられて迷惑そうに顔を背けている柴犬をよく見かけます。犬が喜ばないものはご褒美にはなりません。かと言って，このような場合，犬がやりたがること，たとえばしつけ教室から離れてあたりの臭いを嗅ぎに行くことは，トレーニングのご褒美として使うのは難しいものです。（肯定の合図と上手に組み合わせれば不可能ではありませんが，高度なテクニックが必要です）

そこで，このように環境の変化に敏感な犬については，平素から食器を一切使わず，飼い主の手からだけ餌を与えるようにしてみてください。一日の量を取り分けておき，家の中でもお散歩の時でもちよくちよく与えていけば良いと思います。めんどろに感じるかも知れませんが，実際の手間は思ったほどではありません。外出先で手から食事を取る，ということ自体を訓練するわけです。このような習慣にしていれば，外出先のトレーニングでもオヤツを報酬として使うことができるようになります。また，食事時の攻撃性をなくすトレーニングにもなりますので，ぜひ実行してみてください。ただし，それまでに食事中に噛みついたことのあるような犬では，最初は革手袋をして安全をはかりながらやってみてください。

食いしん坊で，どこに行っても何があっても食べ物を出せばガツガツ食べる，という犬は，あえてこのトレーニングをする必要はありません。

#### 【5. 「おあずけ」はほどほどに】

食事の前に訓練を兼ねていろいろな指示を与えることは良いことですが，餌を目の前に出してから「待て」（おあずけ）はむやみに長くしてはいけません。食器を前にしてもちゃんと待っているようなら，せいぜい十数秒まで許可を与えてください。餌を前にして消化管運動が活発になっている状態のまま何分も待たせるのは，生理学的にみても決して良いことではありません。そのようなことを繰り返すと，食欲が不安定になってしまう

ことがあります。長く待たせるほど服従心や忍耐力が強化されるというのではなく、むしろ犬にとっては単なる意地悪になって飼い主への信頼感を損ねるおそれもあります。

人間でさえ、宴席などでごちそうを前にしてから延々と演説を聞かされるのはイヤなものです。三度の食事で、料理を並べてから箸をつけるまでの時間を延ばすトレーニングをしても、つまみ食いや間食の習慣が改善することはありません。

食べ物に対する忍耐力の訓練は、食事の前のおあずけを延ばして行くのではなく、食事時間以外に行うべきです。犬の行動範囲に何気なく食べ物を置いておき、もし食べようとしたり鼻をつけたりしたらその瞬間に制止し、きちんと食事として与えられる時以外には勝手に食べてはいけないことを教えて行きます。

よくテレビ番組などで見かける、食器を前にしての「待て（おあずけ）競争」などは、単にかわいそうなだけで、トレーニングとしては百害あって一利なしです。愛犬家の集まりなどでも行われることがあるようですが、面白半分の意地悪には賛成できません。

## 【6. 犬の食事と人間の食事、どちらが先？】

「リーダーシップを取るために犬の食事は人間の食事の後で与える」ということがよく言われます。しかし、人間より先に与えている犬と後で与えている犬との服従性を科学的に比較検討した研究はどこにもありません。「オオカミの群れではリーダーが食べ終えたあとで下位の個体が食べ始めるから」という説明がなされることもありますが、オオカミの群れの食事と家庭の中での犬の食事とは全く違います。床に食べ物を置いて、人間も犬も同じものを取って食べるのであれば、たしかに先か後かということが問題になるかも知れません。しかし、そんな食事をしているお宅がどこにあるでしょうか。

リーダーシップに関係があるとすれば、犬がおねだりした時に人間の食べているものを分け与えるかどうかです。おねだりは可愛らしく見えますが、要求行動に応じていれば犬にペースを握られてしまいます。そもそも人間の食事中に分け与えることは賛成できませんが、どうしてもやりたいのであれば、おねだりをする前に与えて下さい。

犬と人間の食事時間が離れているなら、どちらを先にしようが関係ないと思いますが、時間が接近しているのであれば、犬に先に与えることをお勧めします。必ず“人間の食事→犬の食事”という順番にしていると、「人間が食べる」という行為を「間もなく自分にも食べ物が来る」という合図として学習させ、食事の時間に限らず、人間が物を食べる時には常に期待を持たせてしまうこととなります。その結果、要求行動も出やすくなり、つ

いついおねだりに負けてしまうことにつながります。おねだりに負けないとしても、人間が食べている間中、今か今かと期待させ続けるのはかわいそうではないでしょうか。

犬に先に与えて、人間が食べ始めたら犬には絶対に食べ物を与えない、ということを徹底すれば、「人間が食べる」という行為を「もう食べ物は与えられない」という合図として理解します。そのトレーニングが完成すれば、間食の時でも、食べ物を取り出す時には当然興味を持つでしょうが、人間が食べ始めてしまえば「自分の物ではない」と理解し、諦めがつきやすくなります。犬のおやつについては、人間の食事や間食とは無関係に、何かの報酬として意味を持たせて与えて下さい。

## ～～～ 10 散歩を始める ～～～

### 【1. 散歩の意義】

散歩は単なる運動ではありません。いろいろな環境になじませる勉強の機会であり、変化のある状況の中で飼い主とコミュニケーションを取る大切なトレーニングの時間です。散歩の価値を認識して、常に「より良い散歩」を考えてみてください。

### 【2. 散歩開始の時期】

獣医師によっては「生後3～4ヵ月を過ぎてワクチンの効果が出るまでは絶対に外出させないように」と指導する人もいますが、子犬の心理的発達にとって最も大切なこの時期を隔離状態で育てると、一生涯、他の犬との正常な付き合いができなくなってしまうことがあります。とくに日本犬など、警戒心の強い犬ではこの弊害は大きくなります。多少のリスクはあっても、早い時期から外の世界に馴染ませ、多くの人や犬に会わせてやることをお勧めします。不安があればワクチン済みの管理の良い犬を選んで交流させてやれば良いでしょう。生後2ヵ月くらいまでは母犬の元で親子や兄弟の付き合いを学ばせ、それ以後は積極的に外に出していろいろな体験を積み重ねることが、情緒的なバランスの取れた犬に育てることにつながります。

### 【3. 運動の量】

子犬の性格にもよりますが、小さな頃はペース配分の感覚がなく、気分次第ではしゃぎ

回って急に疲れて座り込んでしまう、ということがよくあります。そのようなことがあったら、どの程度が限界なのかを覚えて、次からは過度にならないようにしてください。なお、座り込んだ時に抱いて帰るのは癖になるので良くありません。怪我や故障をしていないかぎり、休ませながら自分で歩かせて帰りましょう。

#### 【4. 鎖や紐を「束縛」と結びつけさせない】

一度放してしまうと繋がれるのが嫌で呼んでも来ない、という犬をよく見かけます。近くまでは来ても、リード（引き紐）を見ると手の届かない距離に離れてなかなか捕まらない犬もいます。「鎖や紐は束縛、そこから離れれば自由」という意識を一旦持たせてしまうと、今後のあらゆるトレーニングにおいて致命的なマイナスになります。この意識を絶対に持たせないように、一度の失敗もないように細心の注意を払ってトレーニングしてください。

子犬に初めてリードをつけると、大抵の場合は気にして嫌がり、リードを噛んだりイヤイヤをして後ずさりしたりするものです。リードを本格的に使う前に、15～20センチくらいの短い紐をナス環につけたものを作って、引きずらせながら遊ばせておくのも良いと思います。首輪にそれをつけてからおやつを与えるようにして、「首に何かをつけられると良いことがある」という感覚を作っていきます。

次に、2～3メートル以上の長い紐（細引など）にナス環をつけたものを作り、散歩の時、リードが張らないように犬の動きに合わせてやって、繋がれていることを意識させないようにします。犬の動きに合わせて手繰ったり出したり、人間がついて行ったりして、張らず引きずらず、常にリードにテンションがかからない状態にしておきます。伸縮リードでも良いのですが、常に軽く引っ張られているため、リードをつけられているか外しているかがすぐに分かっけてしまいます。面倒ですが、最初は長い紐を操って繋がれていることを感じさせないようにした方が良いと思います。

家の中や庭では、空腹時に放してリードをつけてから食事にする、など、リードをつけた方が良いことがあるように演出してやってください。野外で放してやる際には、呼びに応じて来たらすぐに繋いで拘束してしまうのは良くありません。やって来たら放したまま遊んでやり、何気なくリードをつけてそのまま遊びを続けてやってください。ただし、思い通りに手元に戻ってくるとは限りませんので、ある程度トレーニングが入るまでは放さない方が無難です。遊ばせてやる時も常にロングリードをつけておき、短いリードに付け



替えた時におやつの一つも与えるようにしてください。

3～4箇月齢を過ぎれば、人間より犬の方が足が速くなってしまいますから、ロングリードを張らせず引きずらせず手繰ってついて歩くというのは難しくなってきます。この段階で、日常の散歩用具を巻き尺式の伸縮リードに変えると便利です。伸縮リードを使いこなす自信のない方は一般の散歩用リードでも結構です。そして、この頃から引っ張らないしつけや脚側行進の訓練を始めます。

### 【5. 置き去り体験】

子犬がごく小さいうちに、リードを外して自由に歩かせておいて、飼い主が物陰に隠れたり走って逃げたりして探させる、ということは何度もやっている、自由に歩いている時でも常に飼い主を意識する習慣ができます。住宅地では難しいので、犬を入れて良い公園や野外に連れて行って試してみてください。人けのない、犬にとって未知の場所があれば最適です。数回置き去りの不安を体験させたあと、名前を呼んで走って逃げるようになれば、何かに夢中になっている時でも飼い主の声によく反応するようになります。人間よりも走るのが遅い時期にぜひやってみてください。

## ～～～ 11 成長してからの散歩 ～～～

### 【1. 通常の散歩（3～4箇月以後）】

特別に歩き方を教えていなければ、元気な犬なら先に立つのが普通で、それ自体は特に悪いことではありません。「犬を先に歩かせる癖をつけるとアルファ症候群（権勢症候群＝犬がボスになる）になってしまう」という説がありますが、先を歩くか後からついて来るかという形式的なことは、じつは、リーダーシップとは直接関係ないのです。ましてや、絶対に飼い主よりも前に出ないような抑制されすぎた犬を作ることが良いしつけだとは思えません。

ただし、終始引っ張られながら人間が否応なくついて行く、というような歩き方をしていれば、犬は「引っ張るから前に進める」と勘違いしてさらに引っ張るようになります。抑えようと後ろに力をかければますます引っ張り返します。いくら叱ってもその場かぎりではほとんど効果はありません。

引っ張らないように教えるなら、普段はかならずリードを緩めておき、リードが張って力がかかった瞬間に、その場でピタッと立ち止まってください。最初はさらに引っ張ろうとするかも知れませんが、そのままでいればほどなく力を抜くはずで。さらに待てば、「あれ？」という感じに振り向いてくると思いますので、その時に「よしよし」とほめて歩き出して下さい。これを例外なく続ければ、「リードが張れば進めない」「リードが張らなければ進める」という法則を理解します。ただし、散歩の順路や目的地がいつも同じなら、立ち止まるトレーニングだけでは引っ張り癖は直りません。立ち止まってから再び歩き出す時に、進行方向を変えることも混ぜて、目的地を決めないようにして下さい。

人間が普通に歩く速さは、じつは、ほとんどの犬にとっては遅くて歩きにくいのです。そのためどうしても犬が先行し、自然に引っ張ることが習慣になって行きます。犬が普通に歩く速さは人間が軽く走る程度なので、ジョギングのつもりで散歩をすればちょうど犬とペースが合ってリードが張ったままになることは少なくなります。「引っ張ったら進めない」ということを教えるとともに、なるべく犬の歩きやすいペースで「引っ張る必要はない」ということも教えて下さい。我慢をさせるだけでなく、適切なペースを見つけて、リズムカルに飼い主と犬との両方が散歩を楽しむようにしたいものです。

臭い嗅ぎについては、完全に禁止すると散歩嫌いにしてしまうこともあるので賛成できませんが、すべて犬の自由にすると時間ばかりかかって全然前に進まないことになります。適当な所で「行くよ」などと声をかけながらさっさと歩き出してください。時には「行くよ」の声と同時にダーッと走り出してしまいます。これを続ければ、「行くよ」の声でハッとして歩き出すようになります。また、臭い取りに限らず犬が興味を持つものを注意して観察し、不都合なもの（捨てられた食べ物や動物の死骸など）であれば即座に禁止して下さい。

散歩というのは犬と人間との群れ行動ですから、前を歩こうが後ろを歩こうが、根本的なイニシアチブは飼い主が取らなくてははいけません。かと言って、行動を規制し過ぎると犬にとってはつまらないものになってしまいます。きちんとリーダーシップをとりながらも、時には犬が興味を持つものを一緒に覗き込んでゆったりして、周囲の状況を犬と共に楽しみながら歩くことで自然に良い関係ができてくると思います。

## 【2. 脚側行進を教える】

人間の横について歩く「脚側行進」はあらゆる作業犬の基本課目です。一般の家庭では

「おすわり」「待て」「来い」は教えても脚側行進まで教える人は少ないようですが、家庭犬であっても脚側行進は非常に役に立つのでぜひ教えてください。

教え方は、おやつやボールなどのご褒美で意識を引きつけながら教える方法、リードによる強制で教える方法、およびその二つの混合があります。どんなトレーニングでもそうですが、基本的には誘導的に楽しく教えるべきで、少なくとも号令の意味を理解するまでは強制に頼ってはいけません。号令の意味を十分に理解したら、犬の反応を見ながらたまに強制を併用しても良いと思います。

おやつを使うのであれば、小さな食べ物（小粒のドッグフード、チーズやソーセージを細かく切ったものなど）を犬と反対側の手に握り込んで、犬の鼻先に掲げて、首輪と人間の足が並ぶような位置に誘導し、歩きながら「ついて」の号令とともに一粒ずつ与え続けます。このようにして数歩進んだら立ち止まり、横に並ぶ位置でお座りをさせて、最後にかならず終了の合図（「はなれて」または「おしまい」など）を出して終了します。終了の合図を出しても犬の方に視線を向けていれば、犬はまだご褒美が出るものと思って解除が理解できないので、「はなれて」と言ったらすっと犬から視線を外して素っ気なく歩いて下さい。

もし練習中に興奮して手にかじりついてしまったらその時点でトレーニングを中止して下さい。この段階ではまだ罰を与える必要はありません。

なんとなく意味を理解してきたらおやつを与え続けることをやめ、最初に「ついて」の号令を出し、おやつを握った手で自分の足の外側を軽く叩いた時にだけ一粒与えます。このようにして徐々におやつを与える間隔を広げながら、足を叩けばすぐにこちらに意識を集中するように習慣づけて行きます。跳び上がっておやつを取ろうとしたり、勝手によそに行きそうになった時には、警告の言葉をかけて正しいポジションに誘導します。チョーク（リードによるショック）をかけて警告を与える方法もありますが、犬の性格によっては、嫌な刺激を与えられると脚側行進の練習そのものが嫌いになってしまうことがあるので、犬の性格をよく見て判断してください。いずれにしても、意識が逸れるような機会が頻繁に出てくるなら、その犬にとって難し過ぎるということなので、一段階前の、短距離をおやつを与えっぱなしにして歩くトレーニングに戻ってやり直して下さい。

次に、まっすぐ歩くだけでなく左右に曲がったり立ち止まったり、あるいは歩速を変えたりして、どんな状況でも常に人間の横についているようにトレーニングして行きます。この段階になれば、おやつを与える頻度をぐっと減らし、意識が逸れそうになった時や方

向変換をする時、立ち止まって座らせる時などだけにして行きます。前や後ろにずれすぎたり間隔が離れすぎたりした時には、突然立ち止まって、犬の方から横について来るのを待ち、ほめてから歩き出してください。いくら待っても犬の方から寄ってこないようならまだ「脚側につく」という意味が十分に理解できていないのですから、前の段階に戻ってトレーニングしなおしてください。離れ気味になった時に軽いチョークで警告を与えて正しいポジションに戻す人もいますが、頻繁にチョークで合図を送っていると、飼い主にとっても犬にとってもそれが癖になり、常にピッピッとリードでショックをかけているようなお散歩スタイルになってしまうので、あまりお勧めしません。

以上のようにして、脚側行進の号令が出たらどんな状況でも常に人間の横につくこと、止まっていれば足の横で座り、歩いていれば同じ歩調で進むように教えて行きます。

散歩中ずっと横に付いていることを要求して、犬が引っ張るたびに常に叱っている失敗例を見かけます。脚側行進は「引っ張らないしつけ」とはまた別のものです。長距離を脚側行進で歩くことができるようになるのは、正しいトレーニングを長期間積んで、なおかつ犬がある程度おとなになって自制心ができ上がってからのことです。終始従って歩くことを要求するのではなく、人間の真横につくというポジションを理解させることが先決です。言い方を変えれば、横について歩くことを教えようとするよりも、二つのパターンの歩き方（脚側行進と自由歩行）があることを理解させることが肝心です。そのためには、最初のごく短い間隔で脚側行進と解除を繰り返してください。ご褒美を上手に使いながら集中できているうちに解除してしまい、次にまた脚側行進の号令が出されるのを楽しみにするようにしてください。

リード＝束縛という意識をなくすための一環として、ある程度脚側行進の意識がしっかりしてきたら、危険のない状況を選んで、リードを外して脚側行進、リードをつけて解除の号令をかけて自由歩行、という練習を並行して行うことをお勧めします。これを徹底してやると、リードをつけられた意識が薄いために解除の号令とともに走って引っ張る場面も出てきますが、あまり引っ張るようなら立ち止まったりまた脚側行進を命じたりすれば良いことです。少しでも引っ張るような犬はしつけの悪い犬だ、というような偏狭な考えに迎合するより、つながれていても放されていても全く同じ態度でいるようにトレーニングする方がはるかに実用的だと思います。（用心のためにロングリードをつけっぱなしにしておき、短いリードをつけて自由歩行、外して脚側行進、という方法でも結構です）

なお、脚側行進は人間の左側につけるのが通例ですが、小型犬で訓練競技会に出すつも

りがないのでしたら、人間の右側につくように教えた方が良いかも知れません。車道と歩道が分かれていない道を歩く際、犬を自動車の反対側にする方が安全だからです。「犬は本能的に左側につく」と言う人がいますが、右側につくように教えた犬でも全く不都合はありませんでした。

### 【3. ノーリードでの散策】

市街地でノーリードにすることは絶対に勧められませんが、誰もいない山林や海岸、河原などを移動する時には、繋がなくても一定の距離以上には離れて行かないものです。

「置き去り体験」をお勧めする理由と同じですが、知らない場所での不安感や犬に群れの一員であることを強く意識させます。飼い主の動静に気を配りながら自主的について歩くことは、自然なリーダーシップにもつながります。できるかぎり機会を作って、自然の中で放して連れ歩くことをお勧めします。ただし、移動ではなく一定の場所に留まる時（食事や休憩など）には必ず繋ぐようにして下さい。飼い主が留まっていることに安心すれば、好奇心のある若犬は勝手に遊びに出かけることが多く、非常に悪いトレーニングになってしまいます。

もちろん、人影が見えたらすぐにリードをつけて迷惑にならないようにすることは言うまでもありません。（それができないような犬は絶対に放してはいけません）

山林などに入る際には、猟期（11月15日～2月15日）は避けた方が安全ですし、逆に禁猟区や鳥獣保護区では野性動物に影響を与えないように十分配慮してください。

### 【4. 放し飼いは厳禁】

犬の放し飼いは法律で禁じられていますが、しつけという意味においても良くありません。ノーリードでの散策やハイキングは、群れのリーダーとして犬を引き連れる行動ですが、「放し飼い」は犬だけで勝手に行動する習慣をつけてしまいます。自立性の高い犬を幼い頃から放し飼いにすると、自分だけの世界を作るようになって、群れの一員としての自覚が低下し、一匹狼のような性格にしてしまうことがあります。自分で決めたテリトリーを守るために、路上で見知らぬ人に噛みつく危険もあります。郊外や農村部などでは、寒い時や天候が悪い時など散歩が面倒なときに、犬だけを放してしばらく勝手に遊ばせる人もいますが、これもあまり良くない習慣だと思います。散歩というのは犬にとって一番楽しい時間であり、それは常に飼い主（リーダー）の主導のもとで行われなければ

いけません。

## ～～～ 1 2 飼い主の手に馴らす ～～～

### 【1. 飼い主の手にならず必要性】

家族以外の者に対する警戒心や攻撃性については、番犬の役目を重視するか同伴犬にするか、その目的によって育て方も違ってきます。しかし、飼い主に対する攻撃性だけは例外なく除去しなくてはなりません。

子犬を育てはじめてしばらくはどのお宅でも頻繁に抱いたりなでたりするものですが、外飼いの場合には、成犬になるにつれてだんだん体に触れる機会が減ってくるのではないのでしょうか。皮膚感覚の鋭敏な犬では、人の手になじませずに育ててしまうと体を触った途端に反射的に噛みつく犬になりかねません。甘えてまとわりつく犬は自然に触れ合う時間が多くなりますが、素っ気ない犬や神経質な犬ほど、逆に意識的にスキンシップを図る必要があります。「触りすぎると悍威に欠けた犬になる」などと言う人もいますが、人間の手を受け入れるようになったからと言って、犬自身に備わった気迫がなくなるようなことはありません。表面的な荒々しさと内面の強さとは全く別のものです。

### 【2. 人間に身を委ねる練習】

犬がリラックスしている時に、最初は首筋や胸などを軽く搔いてやることから始めて、いやがらないように徐々に慣らしながら、最後は全身のあらゆる場所を素直に触らせるようにして行きます。子犬のうちならすぐに慣れるでしょうから、膝の上で仰向けにしたり後ろから脇の下に手を入れていわゆるパンダ座りをさせたり、検査を兼ねて、耳、足先、尾、口の中など触ったりして、かならず最低一日数分はスキンシップを図ってください。もし、最初はおとなしくしていても途中からむずかかってジタバタしたら、その時すぐには放さず、ひとしきりして静かになったら次にまた動きだす前に放してやります。暴れた時に解放してしまうと、かえって、犬のペースでしか触らせない練習になってしまいます。最初から長時間拘束しようとせず、どの程度なら機嫌良く体を預けているか良く観察しながら、なるべく飽きて暴れる前に合図を出してから放してやってください。

人の手を嫌わない犬にするには、子犬の時だけではなく成犬になってからもずっと続け

ることが必要です。

### 【3. 無理やり拘束しない】

最初からいやそうな時に無理に押さえつけて触るようなことは絶対にやめてください。あくまでも気分の良い時に自然な流れで行い、人の手は心地良いものという感覚を覚えさせるのが目的です。「子犬をひっくり返して押さえ続けることで服従心を育てる」と指導する人もいますが、我慢させながら上下関係を見せつけるためのスキンシップではなく、あくまでも人の手に馴らす練習と考えてください。たとえば、山から拾ってきたばかりのオオカミの子を無理やりひっくり返して「オレがボスだぞ」と言ってなつくのでしょうか？野性動物を手なずけるくらいのつもりで、いやな思いをさせないように段階を踏んで行ってください。

## ～～～ 13 他人や他犬に馴らす ～～～

### 【1. 隣人に嫌われないために】

番犬としての役割を第一に考えた場合には、他人に触れさせないで育てる方が警戒心は強くなります。しかし、人間を見れば見さかしく吠えかかる犬が「良い番犬」ともてはやされた時代は過ぎ去りました。近所の人や飼い主と親しく話す相手には友好的で、見慣れぬ人に対しては少し警戒し、怪しい行動を取る人間には激しく威嚇する、というのが現代社会にふさわしい番犬です。そもそも、人が通るたびに吠えているのでは鳴りっぱなしの非常ベルと同じで、いざという時にも「ああ、また通行人か」と思って気にも留めないということになります。やたらに吠えついて近隣から嫌われないように、子犬の頃から他人の手になじませ、近所の犬などにも会わせておきたいものです。

普通の家庭犬として飼われるなら、人間に馴れすぎて困るということはまずないと思いますので、できるだけ多くの人に会わせることをお勧めします。ある程度大きくなったら積極的に人ごみに散歩に連れ出すことも必要です。また、万一の噛咬事故を起こさないために、とくに意識して子供達と接触させ、仲良く遊ばせる機会を作ってやることも大事だと思います。（その際には、子供が犬の嫌がることをしないようによく見守っててください）

## 【2. 人見知りが激しい子犬の場合】

小さな頃から人見知りが激しい犬の場合には、無理をせずに段階を踏んで馴らしてください。臆病な犬に対して、他人がいきなり「大丈夫だってば！」と強引に抱いたりリードを引っ張ったりするとなおさら対人恐怖症をひどくしてしまいます。

最初の段階は、他人が家に来た時に、その人が近づかない状態で家族がおやつを与えてください。何度も繰り返して「誰か知らない人が来た→おやつがもらえるから嬉しい」という感覚を作ります。子犬の反応を見ながら次第に他人に接近してもらうようにして、他人が同じ部屋に入った時に家族がおやつを与える→他人が離れたまま子犬に声をかけた時におやつを与える→他人が近づいて声をかけたらおやつを与える、などという具合に徐々に報酬を与えるまでの条件を厳しくして行きます。臆病な犬の場合、他人の手からおやつを与えてもらうのはかなり馴れてからにします。その時も、最初は子犬と正対せず、視線も合わせずにおやつだけ差し出して与えてもらいます。最後の段階では知らない人に見つめながら撫でてもらったり抱き上げてもらったりします。屋外でも同様に段階を踏んでトレーニングをしてください。

こういう性格の犬では、ひとりの人に抱かせるようになったからと言っても、別の人が相手だと全くふりだしに戻る場合があります。くれぐれも無理はさせないようにしてください。

「少しは番犬の役割もしてほしいから馴らしすぎると将来困る」と思われる方がいるかも知れませんが、子犬の時に人見知りの激しかった犬は、どんなに馴らしても「番犬にならない」というほど警戒心がなくなることはありません。

## 【3. 他の犬への馴致】

他の犬に対しては、相性の良い相手との交流を中心にしながら、努めていろいろなタイプの犬と接する機会を与えてください。

喧嘩っ早いわけではないが相性の良し悪しをはっきりしている、という犬では、初対面でいきなり自由に接触させるとかえって失敗することがあります。このような場合、無理に挨拶させようとせず、距離を取って並んで歩いたりすれ違ったりするトレーニングから始めて、回数を踏んで少しずつ馴らして行くのが無難です。公園やドッグランなどでは、社交好きな犬種を連れてくる人から「放して一緒に遊ばせてあげれば？」と誘われるかも



知れませんが、神経質な犬ではハイテンションの大歓迎が苦手なことが多いものです。遊ばせてやろうとしてかえって喧嘩癖をつけることにもなりかねないので、様子をよく見ながら徐々に馴らしてください。

逆に、フレンドリーで遊び好きな犬は、相手の気分にお構いなしにふざけかかったりしないように、リードでコントロールしながら、いったん待たせてから穏やかに近づくようにさせてください。「うちのコは喧嘩しないから大丈夫」と言って全く自由に遊ばせる人がいますが、そういう癖をつけると、「遊びに行くならすべてが許される」とばかりに嫌がる相手を追い回すような礼儀知らずの犬になってしまいます。犬を見れば勝手に寄って行くのではなく、時には無視して通りすぎる練習も必要です。フレンドリーも度が過ぎれば単なる無礼者です。

#### 【4. 犬に対する攻撃性の除去】

警戒心の強い犬では、散歩中に他の犬に会うと過剰に反応する（吠えかかる、びくついて尻込みする）犬も少なくありません。そうした場合には、他の犬がいる時に、気にするかしらないかのぎりぎりの距離で少しずつ食べ物を与えながら歩いたり、好きなおもちゃで誘導したりして、注意を別のところに引きつけて下さい。最初から近距離でやろうとしても、他の犬が気になって食べ物などには見向きもしませんから、必ず十分な距離をとって始めて下さい。この練習を繰り返しながら徐々に距離を短くして行くと、散歩中に犬が出てきてもあまり気にせず、むしろ飼い主の方を期待を持って覗き込むようになります。

いくら地道にトレーニングを積んでも、どうしても自分から好んで喧嘩を仕掛けて行く犬（闘争嗜癖）がいます。日本犬の雄などは、早期社会化を心がけて幼い頃はどんな犬とも友達になれても、思春期になると急に喧嘩を仕掛けるようになることがあります。そのような闘争嗜癖では、相手の犬を認識したとたんに戦闘モードになってしまい、食べ物など見向きもしなくなるため、ご褒美によるトレーニングだけでは矯正が困難です。以下に矯正の方法を述べますが、罰の使用は一步間違えると悪影響だけを残すことがあるので、できるだけ良い指導者に相談して下さい。

他の犬に向かって自分から仕掛けて行く場合、暴れる犬を引き戻して制止しようとするれば、かえって攻撃行動を助長してしまいます。飼い主が甲高い叱り声をあげたりすればさらに興奮します。

このような場合、緊張から攻撃行動に切り替わる瞬間、唸りながらダッと突っ込んで行

く瞬間に、一瞬にして興奮を覚ますだけの刺激を与える必要があります。具体的には、遠隔操作のスプレー首輪やカウンター的なチョークなどの手法がありますが、どの方法が適するかは犬の個性によって違います。素人療法をせず、必ず専門家の指導を仰いで下さい。

これらの刺激はあくまでも一瞬だけで終わらせ、ごく事務的に行い、決して叱り声をあげてはいけません。興奮が強くて一度の刺激では効果がない場合には、その場で何度も同じことを行うのではなく、二度目にはくるっと後ろを向いて早足で遠ざかり、攻撃の対象から意識を外して下さい。

このような対処を続けていると、それまでなら喧嘩を売っていたようなシチュエーションでも、攻撃せずににらむ程度で止まることが多くなります。その時こそ、名前を呼んだりして飼い主の方を向かせ、大げさにほめてご褒美の食べ物も与えて下さい。以前は食べ物など見向きもしなかったような状況でも、ご褒美を出せば食べるようになっているはずです。

一見攻撃的に見えても、やや後ろに下がりながら「こっちに来るな！」と言う感じに吠える犬は、一定以上の距離（1～2 m程度）があれば攻撃行動を見せないものです。これは積極的な闘争嗜癖とは異なります。このような犬には決してショックを与えてはいけません。恐怖感の裏返しで相手を近づけまいとして吠えているのですから、その時に嫌悪刺激を与えると、他の犬と会うことについてさらに恐怖感を持つようになってしまいます。その犬が平静でいられる距離をよく認識し、食べ物を与えながら歩いて馴らすトレーニングを根気よく続けて下さい。このような犬に対して「仲良くしなさい」などと言って他の犬を無理に近づけるのはまったくの逆効果で、“窮鼠猫を噛む”状態に落とし込める結果になります。

#### 【5. 放れ犬への対処】

万一野犬や放し飼いの犬が攻撃してきた場合でも、犬同士の喧嘩は絶対に避けてください。勝っても負けても悪い影響が残ります。他の犬が向かってきたら、リードを短く持ちながら自分の犬を厳しく制止してください。ぴったり横につけておけば、相手はかならずこちらの犬に向かって近づいて来るので、できるかぎり引きつけておいて顎を狙って蹴とばせば、驚くほど簡単にヒットするものです。全神経をこちらの犬に集中している時に思いがけないところから攻撃されるため、ほとんどの犬はびっくりして一目散に逃げて行きます。

自分の犬にとっては、挑発されても我慢する自制心の訓練と、飼い主こそが敵味方の判断をするのだ、というリーダーシップを見せる絶好の機会です。放れ犬にとっては、公の場所で他の犬に攻撃をしかけるとイヤなことが起こる、という教育の機会です。ただし、いくら正当防衛でも相手の犬の胴体を蹴るのは避けてください。重大な障害を与える危険性があります。

素手で怯まずに対処する自信のない人は、野犬や放し飼いの犬が多い場所を歩く際には痴漢撃退用スプレーなどを持参し、喧嘩になる前に相手の犬を遠ざけてください。タイミングが遅れて犬どうしが絡み合ってしまったからでは自分の犬にまでスプレーをかけることになり、「他の犬が近づくと嫌なことが起こる」という悪い訓練になってしまいます。

#### ～～～ 14 コマンド（命令語）の訓練 ～～～

「うちは単なる家庭犬だから特別な訓練は必要ない」という人もいます。たしかに、最初に書いた通り、ちゃんとした関係を築いてさえいればそれだけで通常の生活で困ることはありません。しかし、いろいろな号令を教えればさらに一緒に楽しめることが増え、より深いレベルでのコミュニケーションができます。また、犬が自然に発する行動のすべてに号令を決めておけば、犬がやりたいことを先回りして号令としてやらせ、たくさんほめてあげることができます。

日本犬飼いのベテランの中には「号令なんか教えてはいけない。犬がバカになる」とか「芸は教えない方が良い」などと言う人がいます。自ら状況を判断してそれにふさわしい行動をする犬を理想としているのだと思いますが、そのように育てて行くことと、号令を教えることは何ら対立することではありません。以心伝心の関係を築きながら、数多くの号令にも鋭敏に反応させることは十分に両立可能です。どこまで伸びるのか、楽しみながらトレーニングしてみましょう。

#### 【1. 号令（声符）を決める】

号令（命令語）は、犬にとってわかりやすいもの、つまり短くて区別しやすい言葉を選んで下さい。家族の間でばらばらの号令を使うのではなく、言葉とその意味をきちんと統一してください。その条件を満たしていれば、どんな言葉にするかは基本的に趣味の問題

です。「日本語より英語の方が犬に認識しやすい」などと主張をする人がいますが、科学的な根拠は全くありません。「人間どうしが使っている母国語よりも外国語にした方が良い」という意見もあり、たしかに一理はあると思いますが、そのような理由でアメリカの飼い主がドイツ語を使っているという話は聞いたことがありません。

## 【2. 許可と賞詞は区別する】

従来日本では「よし」という言葉を許可とほめ言葉の両方に使う習慣がありますが、これは好ましくありません。「待て」に従っている時に「よしよし」とほめると、待てを解除されたものと勘違いして動いてしまうこととなります。ほめ言葉と許可の言葉は別のものにしてください。

例	ほめ言葉	許可・解除
	よし	⇔ いいよ
	いいこ	⇔ よし
	Good	⇔ O.K.

なお、わが家では許可一般の言葉はなく、犬がやりたいこと（食べる、自由に離れる、興味のあるものに向かう、等）はすべて号令として与えています。この利点については、「18. 主要なコマンド」の章の最後でお話しします。

## 【3. 視符（サイン）を決める】

基本的なものについては号令だけでなく視符（手のサイン）も決めておきます。誘導的な視符を使い続けていると、号令のみでは全く反応できないことがあるので、トレーニングの進展に伴って号令と視符のどちらか一方だけでも反応するようにして下さい。日常生活では、場面によってはいずれか一方の合図しか出せないこともあります。

## 【4. 誘導法と強制法】

たとえばおすわりを教える時、最初の段階ではその号令（「オスワリ」という言葉）が何を意味しているのかは当然理解できていません。そこで、何を要求されているのか分からない状態でおすわりの姿勢を取らせる必要が出てきます。そのためには、ご褒美（食べ物やおもちゃ）で注意を引きつけながら誘導してその体勢を取らせる方法と、手でお尻を

押さえたり首を吊り上げたりして強制的にその体勢を取らせてしまう方法があります。

これはよく議論になるところで、古いタイプの訓練士の中にはご褒美を使う方法を頑に否定する人がいます。強制されることを嫌がらない犬であればどちらでも構いませんが、神経質な犬では、理解できない状況で無理やり体を拘束されると「何？ 何されるの？」とパニックになってしまう場合が多いと思います。もしあなたが言葉の通じない国に行って、何かを要求されているがその意味が分からない、という状況になったとしたら、いきなり体をつかまれて“ここに座ればいいんだ”とやられたらどんな気持ちになるでしょうか。それよりは、ジェスチャーでも何でも、とにかく自分から座るように仕向けてもらった方が安心できるのではないのでしょうか。

トレーニングを好きにさせるには、楽しく教えることが大原則です。「食べ物を使って教えると食べ物がないと言うことを聞かなくなる」という人がいますが、決してそんなことはありません。食べ物がないと言うことを聞かない犬もよく見かけますが、それは食べ物を使って教えたからではなく、一番最初の段階のまま、いつまでも食べ物を誘導のターゲットとして使い続けているからです。トレーニングが進むに従って食べ物の与え方を変えて行けば全く問題はありません。野生状態であれば、獲物という報酬（＝食べ物）を獲得するためにいろいろな知恵や技術を身につけて行くわけですから、食べ物を報酬としてトレーニングをするのはごく自然なことだと思います。

ただし、号令の意味を十分に理解した後は、ある程度の強制や従わなかった時の罰則も必要になってきます。報酬だけで全く強制のない号令では、「やりたい時だけやる」という遊びに過ぎません。喜々として行動させるモチベーションと、命令としての強制力とのバランスが大切で、その兼ね合いは犬の個性をよく見て決めなくてははいけません。

#### 【5. ご褒美の種類】

犬が喜ぶことはすべてご褒美として使えます。食べ物、ボール、ぬいぐるみ、引っ張りっこをするロープ、振り回して遊ぶタオルや軍手、等々、犬によって好みに差がありますから、自分の犬が何が好きなのかを知っておくことが大切です。また、普段からいろいろな遊びをさせて好きなもののレパートリーを広げておくこともトレーニングの役に立ちます。食べ物を始めとして、ご褒美には何がいいか（何がいけないか）という議論をしたがる人が多いですが、それは全く無意味なことで、すべては「その犬が何を喜ぶか」ということです。好きでないものは、当然のことながらご褒美としての価値はありません。何を

ご褒美にするかは、人間の価値観で決めるのではなく、犬の価値観で決めなくてはなりません。

食べ物とボールについては、静的なことに対するご褒美に食べ物、動的なことに対するご褒美にはボールが使いやすいと思います。食べている時は動きが止まり、ボールで遊ぶ時は動きがあるからです。ボールにあまり興味のない犬では、くわえられる大きさの密封容器に食べ物を入れて、それを投げて追いかせさせたり持来させてから食べ物を取り出して与えることで動的な使い方もできます。

上手になでることはもちろんご褒美になりますが、ほめることイコールなでることではありません。いきなり手を伸ばしてぐしゃぐしゃと撫でるのは、敏感な犬ではむしろ嫌な思いをさせてしまいます。飼い主はほめているつもりなのに犬は迷惑そうに我慢しているだけ、ということは意外と多いものです。なでる時は犬がどう受け止めているのかをよく観察して下さい。また、神経質な犬では、あまり大げさな声でほめるとびっくりしてしまうこともあります。逆に、いくら嬉しくても、興奮させすぎてしまうと何をほめられたのか分からなくなってしまう場合もあります。はしゃぎ性の犬では、あまり興奮させすぎないように静かにほめてやってください。

物のご褒美やほめることだけでなく、犬の行動自体もご褒美になります。たとえば、しばらく座って待ったらお散歩に行く、しばらくの間きちんとして歩けたら許可を出して自由にさせてやる、というようなやり方です。「自由にして良い」という号令が出ることを楽しみにきちんとして歩くというわけです。

物にせよ行動にせよ、普段制限されていること（やりたいのにあまりやらせてもらえないこと）ほどその価値が高くなります。逆に、制限されていない、いつもふんだんに与えられていることはご褒美にはなりません。本来撫でられることが好きな犬であっても、いつも飽きるほど撫でられていてはご褒美としての価値がなくなります。24時間べったり一緒にいる犬は、飼い主の働きかけそのものに飽きている場合もあります。食べ物も、食の細かい犬やしょっちゅうつまみ食いをさせている犬ではご褒美に使えません。欲求を上手に制限しておき、嬉しいことは勝手に手に入るのではなく、常に何かの報酬として飼い主からもたらされる、という認識を作ります。

言葉や態度でほめること、物のご褒美、報酬として許可する行動、それらを犬の好みに合わせて、時に応じて有効に使うことで、常にワクワクさせながら楽しくトレーニングをしてください。

## 【6. ご褒美（モチベーター）の二つの機能】

ご褒美（餌やボールなど）には次の二つの機能があります。この区別を認識しないで漫然とご褒美を使っていると、ご褒美がないと言うことを聞かない“賄賂犬”になってしまうのでよく注意して下さい。具体的な使い分けはトレーニングのところでお話しします。

### 1. 釣り餌（ルアー）としての機能

- ・新しい課目を教える時などに意識を引きつけて誘導するための標的
- ・行動を動機付ける目的
- ・最初は見せびらかしながら使い、次第に持っているのかどうか分からないようにして使う。（手のひらなどに隠して人間の手意識を移す）

### 2. 行動の報酬としての機能

- ・犬にとって良い結果を与えるための道具。ご褒美、ボーナス。
- ・好ましい行動の結果として与えるもので、行動する前には見せない。できれば用意してあることも悟らせない。
- ・必ずほめ言葉の直後に出す。

## 【7. 環境から受ける刺激を調整する】

トレーニングにおいては、環境刺激の強さを適度にコントロールするということが重要です。外出先で号令を聞かない犬について、「うちではちゃんとできるんですが」というのは、自宅に比べて外出先では気になること（刺激）が多く、そこで号令を聞けるだけのトレーニングをしていないということです。得意な状況だけでいくらトレーニングを積んでも、他の環境に置かれれば全く別問題になります。刺激が強ければ、レベルを一段も二段も戻してトレーニングしなくてははいけません。

苦手なものに馴らす場合などには、その刺激について「とても気になるがパニックにはならないでいられる」という強度に調整する必要があります。たとえば、他の犬に吠える行動をやめさせようとする場合、近距離で教えようとしても興奮してしまって馴らすどころではありません。ある程度の距離を取ることで、「吠えなければ良いことがある」というトレーニングをすることが可能になります。音や乗り物に対する馴らしでも同様です。目安として、明らかに緊張や恐怖感を示していたとしても、好きな食べ物を出せば食べるようであれば、通常の状態であってパニックには陥っていないと考えられます。ただし、

その状態で全く新しい課目を教えることは困難ですから、すでにマスターしている課目の復習か、刺激に馴らすトレーニングだけにしてください。

それぞれの犬について、どの程度の刺激なら気にせずトレーニングに集中できるか、どの程度ならパニックにならずにいられるか、ということを見極めることが大切です。

#### 【8. 飽きる前に終了する】

1回のトレーニングは、犬が集中しているうちに終わらせてください。つつい欲が出て、集中力がなくなってからやめる、ということになりやすいですが、その犬がひとつの課題に集中できる時間や回数を把握して、まだまだやりたがっている時におしまいにして下さい。その代わり、回数を分けて一日に何度もやるのは構いません。新しい課目に取りかかったら、ある程度理解できるまでは期間を空けずにトレーニングした方が習得が早いものです。

#### 【9. うまく行かない場合】

新しい課目を教え始めて、数日以上トレーニングしても何の進展もない場合、その犬にとって教え方が合わない可能性があります。理解できない状態で同じやり方を無闇に続けても犬も嫌気がさしてしまいます。最長1週間を目安として、進歩が見られない場合にはいったんトレーニングを休止するか、全く別のアプローチでトレーニングを組み立て直した方が良いと思います。

#### 【10. コマンドの例】

参考までに、わが家のコマンドを列記しておきます。個人的な趣味として、日本犬に英語コマンドは似合わないと思うのでほとんどは日本語の号令にしていますが、あまり軍隊調になるのもいやなので、訓練所などで使われている号令とは少し違ってしています。家庭で一緒に暮らす犬の場合、課目として教えるコマンドの他、生活の中で声をかけているうちに自然に固定してくるものがあります。○印は最初からそのつもりで教えたもの、それ以外は生活の中で自然に決まってきたものです。

基本	1○よし、よしよし	肯定、賞賛
	2○だめ	禁止



3	こら（強く）	叱責
4	こらこら（軽く）	警告
5	あれ？	ごく弱い警告（自発的に取るべき行動をするまで待つ）
6	ちがう	否定（間違えた時など。叱責や罰則のニュアンスはない）
7	おしまい	終了（命じた行為や自発している行為に区切りをつける）

生活	1	○待て	動作停止，待機（次の号令があるまで動かない）
	2	バイバイ	留守番，待機（人間は離れるのでここにいなさい，の意）
	3	○たべて	採食許可
	4	どいて	退去
	5	○はいって	入居（小屋，ケージなどへ）
	6	おふとん	専用座布団に乗る（はみ出してはいけない）
	7	○おしっこ	排尿
	8	○うんち	排便

姿勢	1	○おすわり	停座
	・ 2	○ふせ	伏臥
仕種	3	○やすめ	休止（安息伏臥姿勢）
	4	ごろん	横臥
	5	かいてん	横回転（ローリング）
	6	○たって	起立
	7	まわって	縦回転（スピン）
	8	○おて	右前足を出す
	9	○おかわり	左前足を出す
	10	ペロペロ	手などをなめさせる
	11	ブルブル	胴震いをする

同伴	1	○こい	招呼（対面停座まで）
	2	いくよ（いこう）	誘導（自由なペースで同じ方向に進む）
	3	ゆっくり	速度を落とす

	3 ○ついて	脚側行進，脚側停座
	5 ○はなれて	拘束解除
動作	1 ○のって	乗車，抱っこ，台に乗る
	2 ○のぼって	梯子や石垣などを登る
	3 ○おりて	下車等
	4 もぐって	トンネルや穴などに入る
	5 くぐって	股くぐり歩き
	6 ○ジャンプ	跳躍，飛越
	7 むこう	前進，前方向に目標物あり
	8 こっち	戻る，手前方向に目標物あり
	9 ○みぎ	右折，右方向に目標物あり
	10 ○ひだり	左折，左方向に目標物あり
	11 まわって	迂回する
作業	1 ○ほえろ	咆哮
	2 しー	咆哮停止
	3 ○かかれ	攻撃，捕獲
	4 とって	キャッチ（フリスビー等）
	5 ○もってこい	持来
	6 わたして	譲渡
	7 ○さがして	搜索

～～～ 15 習慣づけのコマンド ～～～

（食事の前の「待て」，排泄の指示）

### 【1. 食事の前の「待て」】

食べ物が前にあればすぐに食べたくなるのは当然のことです。食事前の「待て」（おあずけ）を教え始める時，食べられる状態にして叱って制止するのは良いやり方ではありません

せん。強い自制心を必要とする訓練は、ある程度大きくなって基礎的なしつけが入った後におこなってください。

最初は、自制心がなくても絶対に失敗しないように、物理的に食器に届かない状態にしながらか「待て」と言い、許可の号令を出してから食べられるようにする、ということをひたすら続けます。

例1：食器を前に置き、繫いだ紐を短く持って「待て」、「食べて」で紐を緩める

例2：犬を抱きかかえて「待て」、「食べて」でもう一方の手で食器を持ってくる

このようなやり方を例外なく続けて1週間もすれば、許可の号令が出るまでは無理に動こうとはしなくなるはずですが、しかし、その程度で補助をなくして本当に「待て」ができるかどうかを試してはいけません。もっと確実になるまで、少なくとも教え始めてひと月かふた月は絶対に失敗ができない状況で習慣づけて行きます。

「待て」という言葉の意味（人間の要求）を完全に理解したあとは補助をやめ、フライングしそうな時には声や手で制止を入れてコマンドを強固なものにして行きます。ただしフライングを繰り返すようならまだ十分に習慣付けができていないということですから、しばらくはまた物理的に補助をして失敗をさせないように練習します。

なお、「食事の与え方」でお話しした通り、必要以上に「おあずけ」の時間を延ばそうとするのは百害あって一利無しです。「許可が出てから食べ始める」ということが理解できれば十分です。

## 【2. 排泄のコマンド】

排泄の時には（排泄してよい場所であれば）必ず声をかけてやってください。わが家では「おしっこ」「うんち」というストレートなコマンドにしてしまいましたが、家族だけに分かる言葉にした方が良くも知れませんが、盲導犬などでは大便小便の区別なく「ワンツー」を号令にしている訓練所もあるようですが、二つのコマンドは分けておく方が便利です。

排尿をはじめたら「おしっこ」と声をかけ、排便を始めたなら「うんち」と声をかけてください。最初のうちはこれをただひたすら例外なく続けます。そのうち、犬が尿意・便意を催した時の様子分かるようになったら、直前にタイミングよく「おしっこ」か「うんち」の声をかけ、排泄したら「よしよし」とほめ、時にはご褒美も与えてやります。十分に理解すれば寝る前や車に乗せる前などに号令で排尿させたり、外出先で場所を選んで排

便させることができるようになります。盲導犬と同じように、許可（命令）を出した時以外には一切排泄をしないように訓練することも可能ですが、一般にはそこまでは必要ないでしょう。

### 【3. その他】

その他、わが家では犬が手や食器をなめている時に「ペロペロ」と声をかけ続け、「ペロペロ」と言うと手をなめるようにさせました。直接役に立つものではありませんが、じゃれ噛みの激しい時期にそれを転化する際に重宝しました。また、胴震いをする寸前にすかさず「ブルブル」と声をかけ、震わせたら「よしよし」と褒めることを続けて、「ブルブル」という言葉で胴震いをさせることができるようになりました。できるだけいろいろな動作・行動について、この「習慣づけで教えるコマンド」を作っておくと後々に便利です。

## ～～～ 16 段階を踏まえてトレーニングする ～～～

一つずつ段階を踏まえたトレーニングについて、お座りを例に取ってお話しします。

### 【1. ご褒美で誘導して形を作る】

#### 1) ご褒美で誘導して座らせる

教え始めの、要求の意味が理解できない段階では、ご褒美（食べ物やボールなど）を見せながら誘導します。食べ物を使うのであれば、一かけらのおやつを持って犬の前に出し、興味を持ったら目の前から頭上にすーっと移動させると、視線の移動とともに自然にお尻が地面に着きます。あまり高い位置に持って行くと立ち上がってしまうので、座った時の鼻の高さを目安にして下さい。おすわりの体勢になったらすぐにほめ言葉と同時に食べ物を与えます。

なかなかお尻がつかない場合には、おやつを持っていない方の手を犬の背中に軽く添えて、誘導で視線が上がるのと同時にすっと腰を押さえて補助してやります。力で押さえつけて座らせるのではなく、頭上に上げたおやつに気を取られているすきに軽く素早くスッと押すのがコツです。ただし、敏感で触られた手の方が気になってしまう犬では

やらない方が良いと思います。

この段階では、確実に「おすわり」の体勢を誘導することが目的なので、号令はかけなくても構いません。誘導方法が悪くなければ、数回でできるようになるはずです。

2) 号令をかけてから誘導する。

確実におすわりの体勢が誘導できるようになったら、まず、号令をかけてからおやつで誘導して、座った瞬間にほめ言葉をかけておやつを与えます。

3) ご褒美を見せずに誘導する

おやつを犬に見せず、手だけで誘導するようにして、座ったらほめ言葉をかけてからおやつを与えます。おやつは指示する手に握り込んでおいても良いし、逆の手に持っても結構です。これもすぐにできるようになります。

4) 誘導から合図へ

誘導的な手の動きは徐々に小さくして行き、合図としての視符に移行して行きます。

## 【2. 誘導の廃止】

誘導の廃止は、通常考えられているよりもごく早い段階で始めます。上記の段階が確実にできるようになったら、その日のうちにこの段階に移行して下さい。おすわりなどの簡単な動作では、教え始めた初日にここまで行けるはずですが、いつまでも食べ物を見せてから号令を出していると、食べ物がなければ言うことを聞かない犬になってしまいますから、くれぐれも注意してください。

ご褒美を見せて誘導することだけでなく、ご褒美を犬の目の前で用意することもやめます。ご褒美はあらかじめ手に握り込むかポケットの中に入れてそのまま「おすわり」の号令をかけ、ちゃんと座ったらその瞬間にほめてご褒美を与えます。それまではご褒美につられて動いていただけですが、この段階で「『おすわり』の言葉を聞いた時に座ればご褒美がもらえる」ということを学習します。この時、座らないうちにご褒美を与えたり、座ってから何秒も経ってからご褒美を与えたりしたのでは、何に対して報酬が与えられているのか犬を混乱させてしまいます。タイミングを逃さずにご褒美を与えることで要求の意味を正しく伝えることができます。

この状態でしばらく（毎日練習して数日間程度）練習を続けます。

## 【2' 誘導のない行動形成】

上記1～2の代わりに誘導をしないテクニックもあります。誘導不可能な動作などについて使われ、「おすわり」の号令で使われることはありませんが、一応これを例にして説明します。

#### 1) 行動の増加

最初は自由に行っている犬を見守るだけにして、自発的に座ったらすぐにほめ言葉をかけて、ご褒美を与えます。これを何度か繰り返せば、飼い主の前で頻りに座るようになります。

#### 2) タイミングの良い合図

座りそうな素振りが見えたらタイミングを逃さずに「おすわり」の号令をかけ、座ったと同時にほめてご褒美を与えます。号令を出さずに座った時には与えません。これを繰り返せば「おすわり」の号令で座るようになります。

### 【3. 要求基準の引き上げ】

「『おすわり』の言葉で座るとご褒美がもらえる」ということを十分に理解し、ご褒美を見せずに号令を出してもちゃんと座れるようになりました。次の段階は要求の内容を少し高度にして、本当の「おすわり」の意味を教えます。

「おすわり」の号令を出して、座ったら声だけでほめ続け、そのあとで遅れてご褒美を与えるようにします。「座ること」ではなく「座ったまま動かないでいること」に対してご褒美を与えるわけです。座ったままの限り、何度でもほめて何度でもご褒美を与えてください。

『おすわり』→座る→『よしよし』→座り続ける→『よしよし』→ご褒美→

座り続ける→『よしよし』→ご褒美

ということを繰り返し、最後に『はなれて』や『おしまい』の解除の合図を出して自由にさせてやります。「お座り」という指示は1回お尻をつくことではなく、解除の号令があるまで座り続けることなのだ、ということのを早い段階で理解させます。座れ、伏せ、立ての号令は、解除の号令があるまでその姿勢でいることで実用的な意味を持ちます。号令に応じてその姿勢を取ることができても、すぐに勝手に動いてしまうようでは単なる芸しかありません。もちろん、小さいうちはそんなに我慢が効きませんから、ちゃんと座り続けていられる時間はせいぜい10数秒というところでしょうか。様子を見ながら、なるべく失敗をさせずに徐々に時間を長くするように練習して行ってください。

以上は座り続ける時間を延ばすトレーニングですが、座るまでの早さもトレーニングして行きます。ゆっくり座った場合には言葉で軽くほめるだけにして、普段より素早く座った時にだけご褒美を与えるようにします。早さと長さの二つを組み合わせるなら、素早く座った時にはその時点でまずご褒美を与え、そのまま声ではめ続けてしばらく動かずにいられたらまたご褒美を与える、というやり方になります。

#### 【4. ご褒美はランダムに】

すでにご褒美を見せないで号令をかけるようになっていきます。次に、ご褒美は毎回ではなくランダムに与えるようにして行きます。号令に従った時には必ず言葉でほめてやりますが、おやつやボールなどのご褒美は、2～3回に1回、数回に1回、という具合に徐々に減らして行きます。ただし、全く与えなくするのが目的ではありません。頻度は減らしながらも、時々形のあるご褒美を与えた方が高い意欲が保てます。どの程度の頻度まで減らせるかは、犬の性格と飼い主の技量によって違いますから一概には言えません。子犬のトレーニングでは、十分に覚えた号令でも4～5回に1回は与えておいた方が良いでしょう。（そのくらいの頻度ということで、5回目に与えるということではありません）

いつご褒美をもらえるのかは犬が予測できないようにします。ふいに命令する時にはおやつが出ない、ゴソゴソと袋を取り出して命令する時にはおやつを与える、などというのでは全くランダムにはなっていません。犬が予測できない状況を作ることによって初めて「ランダム」になり、命令に対する反応を確実なものにして行くことができます。

予測不可能にするには、いつでもご褒美を与えられるように身の回りに用意しておく必要があります。おやつの場合なら、常に身につけておき、号令に従った時には間髪を入れずにほめ言葉と共に与えなくてははいけません。その場合には、ドッグフードの粒を入れっぱなしにしておくとお袋が汚れるので、ササミジャーキーや小魚の干物をちぎったもの、貝柱の干物、油脂分の少ないドッグビスケットなどがお勧めです。汚れても良い服を着ていたりポーチをつけていたりするのであれば、ドッグフードでもチーズでも犬が好む物をいつも入れておいてください。

なお、当然のことながら勝手にポケットに顔を突っ込むような行為は厳しく禁止してください。「いつもおやつを持っているがいつももらえるかは分からない。与えられる時以外にはいくら興味を持ってても手に入らない」ということを教えます。それによって、身の回りに食べ物があっても勝手に覗き込まない習慣をつけることもできます。

また、いつも同じものを同じ量だけ与えるのではなく、時にはとっておきの大好物を与えたり食事並みの量を与えたりして、ご褒美の頻度だけではなく質についてもランダムにしておきます。その場合、一日に与える餌の総量が不安定にならないように、ご褒美として与えた量をきちんと把握してください。

## ～～～ 17 不服従への対処（必ず実行させる） ～～～

### 【1. 黙認しない・取り引きしない】

号令の意味を理解させ、それに従うと良いことがある、ということをお教えしてきました。この段階になれば、教えたことに関して飼い主が何を要求しているのか十分にわかっているはずですが、他にもっと興味を引くものがあったり気分が乗らなかつたりすれば命令は無視されます。これはごく自然なことです。これまでの段階は「号令の意味を教える」というトレーニングですが、ここから「言うことを聞く」というトレーニングに入っていきます。

決して不服従を黙認してはいけません。黙認することは「気が向かなければ命令を聞かなくていい」というメッセージになってしまいます。また、なかなか言うことを聞かない時にご褒美を見せてやらせようとするのはもっといけません。十分理解していることについてご褒美を見せてから号令を出すことは、「これが欲しければ言うことを聞いてくれ」と人間がお願いしていることになり、命令ではなく取り引きになってしまいます。結果的には「言うことを聞いて欲しければそれなりのものをくれ」という犬の要求に従っていることになり、号令を出しているのは人間でも、状況の決定権は犬に預けることになってしまいます。なかなか従わない時に立て続けに号令を繰り返すのも良くありません。そういうことを繰り返していると、飼い主の号令がどこまで本気なのか、回数や声のトーンで判断するようになってしまいます。

十分理解しているはずの号令に対して一回で従わなかった場合には、注意散漫で号令を聞き逃していたのかどうか確認するために、名前を呼んだり手を打ち鳴らしたりして一旦振り向かせてもう一度だけ号令をかけ、それでもだめなら以下の対処法を試します。なお、アイコンタクトを取ってから号令をかけるような習慣にしていれば、聞こえたかどうか再確認する必要はありません。



## 【2. 叱る，罰する】

一般的に言えば，叱られれば気分がふさぎ，テンションは下がります。不都合な行動を止める時や「待て」の号令に従わない時などは叱って効果が出ることもありますが，何かをさせたいのになかなか動かないような時には，叱ればなおさら動かなくなります。

理解しているはずのことにすぐに従わない場合，声で叱ったり嫌な刺激を与えたりして号令が出たかぎりには従わなければいけないことを教える，という手法では，嫌な印象を与えすぎるとその号令が嫌いになってしまうことがあります。叱るというよりも警告を与える程度にしておく方が無難かも知れません。ただし，叱り方が弱過ぎて何の反応もないようではもちろん効果がありません。その犬の感受性を把握することが大切で，くれぐれも加減に注意してください。

また，「叱り方」の項でお話しした通り，頑固な犬に対して力づくの対決で従わせようとすると余計に依怙地になり，飼い主の号令そのものに嫌悪感を持たせてしまうことがあります。嫌悪感が残ったり反抗心が強くなったりすることなく，叱られることでハッと我に帰って言うことを聞く，というような反応であれば，この手段がもっとも簡単で有効です。

## 【3. 半強制的に成功させる】

強制されていることを意識させずに物理的にその行動をとらせてしまい，号令に従ったことにしてほめてやる，という手があります。「おすわり」の号令にすぐ従わない時には腰をちょっとつついて座らせる，「来い」の号令に従わない時にはリードで引き寄せる，というようなやり方です。この時には，最後にやや大げさにほめ，必要に応じてご褒美も与えます。

この手段を実行する際の注意は，決して心理的な強制ではないということです。繰り返し号令を出してだんだん声が荒くなり，それから強制を加える，というのでは，強制されていることを強く意識させてしまいます。1回か2回号令を出して，どうも言うことを聞きそうにないな，と感じたら，感情を一切見せずに抵抗する間もなく物理的に従わせてしまうことです。

強制を受けたことを意識させる前に，犬からみれば「いつの間にか言うことを聞いた形になってご褒美をもらっている」というように感じさせるのがコツです。

#### 【4. 従うまで待つ】

従うまで待つ、という方法もあります。十分に理解している号令であれば、聞こえないふりをしていても実はちゃんと分かっている、従うべきかどうかを両天秤にかけているのです。そこで、他のことができない状態にして（リードをつけていれば短く持って）、もう一度だけ低い声で命令を出して注視し続け、従うまでひたすら待ちます。強制するのではなくそれ以外の選択肢を封ずることで命令の行動しか取りようがない状態にするわけです。しぶしぶでも従ったら大いにほめて、その行動を肯定してやります。この時にはご褒美は与えませんが、次に同じ命令を出した時に素早く従ったら大げさにほめたりご褒美を与えたりしてやります。これを繰り返せば、命令を無視しようとしても時間の無駄で、それよりも素直に言うことを聞いた方が得だ、ということを経験させます。

動きのある命令（来い、持って来い、跳べ、など）を出したのであれば、わずかでも動きを見せ始めた時に「よしよし」と声をかけてほめてやります。命令が分かっているのにそれに抵抗している時には、従うべきか無視するか葛藤して常に心が揺れ動いています。

「従った方が得かな」と考えた瞬間にタイミングを逃さずにほめてやることで、両天秤の均衡を崩してやることができます。

この「待つ」という手段を取るかぎりは絶対に根負けしてはいけません。命じた行動を取るまでは1時間でも待つつもりで臨みます。その覚悟で対処すれば、大抵は遅くても数分のうちには従うものです。その間むやみに号令を繰り返したり脅したりしてはいけません。

これら以外にも対処の方法はあると思いますので、その犬の性格を見ながら工夫してください。すでに理解できている号令については、「やるかやらないか犬の気分次第」ではいけません。表面的には号令に従わせているように見えて、じつはすべて犬のペースになっている、というようなことにならないようにしてください。

### ～～～ 18 主要なコマンドのトレーニング方法 ～～～

#### 【1. 姿勢のコマンド（おすわり・ふせ・やすめ・たて）】

姿勢のコマンドについては、一度に二つ以上のことを教えても混乱して習得が遅れるだ

けです。一度にひとつの課目を教えて、ある程度確実にってからまた他の課目を教えるようにしてください。また、すでに覚えた号令でもできれば毎日復習してください。完全に定着していないうちに何日も間を空けると忘れてしまいます。

「おすわり」はすでに例としてお話ししたので省きます。

「ふせ」はおすわり同様、ご褒美を持って自然に伏せの姿勢になるように誘導します。

おすわりの体勢から目の前のご褒美を急に下げて前足を曲げさせる方法は、大型犬では成功しやすいですが、機敏な犬や小型犬では、むしろ立ち上がって顔だけで餌を追いかけてくることが多いようです。ご褒美で誘導しながら立て膝をした足の下をくぐらせて匍匐前進のような形で伏せさせる方法が最も成功しやすいですが、警戒心の強い犬では人間の足をくぐることを嫌う場合があります。家具などを利用して、無理なく匍匐前進の体勢になるように工夫して下さい。

トレーニングの各段階はおすわりと同様ですが、楽しませながらお手やおすわりなどを教えてあれば、すでに「何かをすればご褒美がもらえる」というゲームの意味が理解できているはずです。そのため、次に知らないコマンドを聞いた場合、「これかな？ これかな？」とお手をしたりお座りをしたり、犬の方から正解は何なのかを懸命に探ろうとするはずです。このような状態になっているなら、最初の「号令をかけずにご褒美で誘導して形を作る」という段階は省いてしまっても構いません。意味は理解できていなくても、

「ふせ」と声をかけてからご褒美で誘導したり軽く手で補助したりして伏せの体勢を取らせ、その瞬間に「よしよし」とほめてすぐにご褒美を与えます。それ以後の段階や不服従への対処についてはお座りの例と同様です。

指導者の中には、「伏せの姿勢を嫌うのは支配欲の強い証拠。嫌がる犬ほど体を拘束し続けて服従心を養う必要がある」と主張する人がいますが、性急に無理強いしても決して良い結果は出ません。訓練教室で強制的な方法で伏せを教えている場合（肩を押さえつける、前足を持って上から覆いかぶさる、等）、他の犬が素直に従って自分の犬だけがいやがって暴れたとしても、それは服従心が足りないわけではありません。知人の柴犬で、肩を押さえたり前足を持ったりして伏せの訓練を続けていたところ、「伏せ」は意地悪される合図だと勘違いして、「伏せ」というと仰向けになって降参するようになってしまったという例もあります。降参ならまだ良いのですが、元々の性格次第では、強引な訓練を施すことでかえって反抗心を煽ってしまいます。たとえ最初はどんなに時間がかかっても、誘導的な方法で楽しませながら教えてください。

「ふせ」はきちんと四肢をそろえたいいわゆるスフィンクスの姿勢ですが、「やすめ」は後足を横に崩した姿勢です。競技会などではこの二つははっきり区別しますが、実際の生活ではとくに区別しなくても困りません。トレーニング自体を楽しむつもりなら区別して教えてみましょう。使い分けとしては、短時間行動を止める時や次の作業の準備体勢には「伏せ」、長時間その場所で待機させる時などは「休め」、ということになります。

「おすわり」から「伏せ」という順序を固定してやっていると、それを一連の動作として学習してしまうので、「伏せ」の号令を理解したらすぐに、立った姿勢からの伏せや伏せた姿勢からのおすわりもトレーニングして下さい。

「立って」は、普通はおすわりや伏せを教えた後で練習します。誘導で立たせるには、座ったり伏せたりしている状態で手に持ったおやつを鼻先に近づけ、意識を向けたら「立って」の号令とともにすっと前に動かします。それにつられて立ち上がったなら、歩き出す前にすぐほめておやつを与えます。おやつを見せての誘導から手のサインだけにして行く過程は「おすわり」と同じです。

誘導だけでなかなか立ち上がらない場合には身体的な補助を加えます。「立って」と言いながら腹の下にそっと手を添えたり足先を入れたりして立つように促してやります。起立姿勢を取ったその瞬間にほめてご褒美を与えます。立った勢いですぐに動いてしまうような犬では、最初のうちは「立って・・・待て!」というように、立った瞬間に手のひらを眼前に出して制止した方が良いと思います。次第に、「立って」の号令だけで動かずにその場で立っていられるようにして行きます。

姿勢のコマンドは、最初は横に並んだ位置か対面状態で教えますが、次第にいろいろな状況でトレーニングして行きます。数メートル以上離れている場合、よそ見をしていたり他のことに注意を向けたりしている場合、こちらに来る途中や走って行く最中、など、少しずつできる場面を増やして、あらゆる状況で瞬時に従うようにして下さい。

## 【2. 待て（用意・停止・待機）】

食事の前の「待て」の教え方は「習慣づけのコマンド」の項ですすでにお話ししました。犬がやりたそうなことをわざと一旦制止する時の「待て」は、「人間の要求と犬の欲求を一致させる」の項でお話ししました。これらは「もうすぐ次の号令が出る」という意味であり、「用意、スタート」の「用意」のようなものです。（もちろんフライングは禁止です）フライングをさせないようにこのトレーニングを続けると、「待て」を命じられる

と次に何の号令が出るか分からなくても意欲満々で待つようになります。

緊急停止の「待て」は「動くな」という意味で、実用上の価値が高いものです。どのような状況でも号令をかけられたらそのまま止まり、次の号令が出されるまで動かないようにトレーニングして下さい。「待て」の意味そのものは食事のしつけなどである程度理解しているはずなので、最初は誘惑の少ない簡単な状況で練習して下さい。自由にしている時にふいに「待て」と声をかけ、停止状態になったら食べ物を与えたりボールを投げてやったりします。徐々に誘惑のある場所で練習しますが、その時にはロングリードを使ったトレーニングも併用し、失敗させないように補助して下さい。

「待て」のもうひとつの意味は「そのまま同じ姿勢を保ち続けなさい」という待機の命令です。もともと、姿勢の号令は、解除されるまでその状態を保つように教えるので、短時間なら「待て」をかける必要はありません。しかし、長時間になると動きやすくなるので、時々「待て」の号令をかけて意識を保ち続けられるようにして練習します。この時、最後にはめてご褒美（食べ物など）を与えておしまい、というトレーニングをしていると、ご褒美を与えることが自動的に解除の合図になってしまうので気をつけて下さい。ご褒美は待っている状態で何度も与え、待ち続ければもっとご褒美がもらえる、と期待している最中に解除の号令を出してしまうのがコツです。「待て」をやめることに対してご褒美を与えるのではなく、「待て」を守っていることに対してご褒美を与えるということです。

性格的に待てが苦手な犬では、トレーニングは必ずリードをつけた状態で行い、繫留したり助手に持ってもらったりして失敗のありえない状況にして練習します。自由な状態で練習して動いたら叱って戻す、ということを繰り返すと、むしろ「言うことを聞かないという選択肢もある」ということを学習させてしまいます。

### 【3. 呼び】

呼びの場合は、お座りや伏せと違って動作を教える必要がないので、考え方はきわめて単純です。教えるのは「呼びに応じて行ったら良いことがある」「呼ばれたのに行かないといやなことがある（または良いことを逃してしまう）」のふたつです。あらゆる機会を利用してこの結果を示してやれば、日常生活のすべてがトレーニングになります。呼びつけて叱ったり、呼びに応じて来たらすぐに繋いで拘束してしまったりすると、「呼びに応じて行くといやなことがある」「呼ばれても損か得か考えてから行動した方がいい」と学習させてしまいます。呼ばれても来ない犬や逃走癖のついている犬などは、このような失

敗をしていることが多いので平素よく注意してください。

課題としてトレーニングする時は、他のことと同じで、「言うことを聞くと良いことがある」という練習を中心にして、成功を重ねて教えて行きます。そして、ごくたまに、呼ばれたのに来ようとしないうちに「従わないという選択肢はない」ということを教えます。この比率を逆にしてトレーニングすると、言うことを聞くようにはなっても、呼びの号令自体に嫌悪感を持ってしまって、呼ばれると首をうなだれながらしぶしぶとやってくるようになってしまいます。いつどのような状況で呼ばれても嬉々として飛んでくるように、楽しくトレーニングしてください。

「来い」（または「おいで」）は、こちらの手の届く範囲まで来てくれれば用は足りませんが、できれば正面か真横（脚側のポジション）に来てきちんと座るまでを一連の動作として教える方が良いと思います。

野外で呼びの練習をする時は必ずロングリードをつけた状態で行います。呼びを無視してどこかへ行ってしまおうのを防ぐためと、わざとこちらに来られない状態にして欲を強めるためです。たとえば、ロングリードを柱や杭などに回してから犬と一緒に少し進み、リードを張らせて犬を止めたまま人間だけがさらに進みます。対面して名前を呼んだりご褒美（おやつやボール）を見せたりして、「来たいのに来られない」という状態を作り、できるだけその気持ちを煽ります。来たい気持ちが頂点に達した頃に「来い」と号令をかけて、同時にリードを放して自由にさせてやります。拘束を解き放たれた犬は一気に走って来るはずですから、足元に来たらすかさず「おすわり」と号令をかけ、座ったらその場でご褒美を与えます。

「待て」がある適度効く状態になっていれば、ロングリードは逃走防止のためにつけておくだけにして、「待て」をかけて遠ざかってから「来い」の号令をかけ、来たらご褒美を与えます。ただし、このパターンばかり続けていると、待てをさせている時に勝手に来てしまいやすくなるので、待たせている場所まで戻ってほめる「待て」のトレーニングも同じ比率でやって下さい。

「来い」の号令の意味を理解したら、ご褒美を見せてから命令することをやめ、予想していない時にふいに呼んでランダムにご褒美を与えるようにします。周囲にもっと興味をひくものがある場合にはなかなか来ないかも知れませんが、その時には、不服従の項でお話ししたように、リードを使って一気に引き寄せ、号令に従ったかのように演出してほめてやります。この時のリード操作は、ショックを与えないように滑らかに、かつ犬が抵

抗する隙がないように速やかに引くのがコツで、決してチョークのような引き方をしてはいけません。（上手な運転手が停止状態から滑らかに高速の流れに乗るようなイメージ）

#### 【4. 持来（持って来い）】

犬と遊んでやって少し興奮させ、ボールを転がしたり小枝を投げたりして追いかけるように仕向けます。しっかりくわえたら声でほめてやり、リードを手繰って手元に来させ、「持ってこい」「渡して」などと言いながら好物の食べ物と交換してやります。ボールにあまり興味がないようなら、ぼろ布や短いロープで引っ張りっこをしてやり、わざと取らせてしまってからリードを手繰って、号令をかけながら好物と交換してやります。ボールを投げても引っ張りっこをしてもすぐに離してしまう場合には、硬いクッキーやジャーキー類をハンカチで包んで結び、それを投げてやります。くわえたらすかさずリードで手繰るのは同じですが、手元に来たら素早く取り上げて、包みをほどいて中身を出して与えます。もたもたして取りっこにならないようにしてください。

「くわえたものを渡すとご褒美がもらえる」ということを理解したら、号令を出してから投げて追わせたり、先に投げて落ちてから号令を出して取りに行かせたりして、バリエーションをつけて練習して行きます。くわえたまま勝手に遊んだりしないように、必ずリードをつけてトレーニングしてください。こちらの手に渡すまでが「持って来い」です。

十分に理解したら「ボール持って来い」「フリスビー持って来い」「新聞持って来い」など、よく持来させる物の名称を教えて区別させれば、生活の中で非常に役に立ちます。

#### 【5. 吠えろ】

生まれつき口の重い犬の場合、そのままおとなになると、異常事態で警戒する時以外には吠えなくなってしまう。3箇月から6箇月くらいの時期に、遊びの中で興奮して吠えることが多くなりますから、その時に機会を逃さずに教えてください。欲しいものを取れない状態にしてじらしたり、激しい遊びで興奮したりして吠えるように仕向けます。そのチャンスを逃さずに「吠えろ」と声をかけ、声が出たらすかさずご褒美を与えます。ある程度できるようになったら、投げた物に吠えさせる、指で示した方向に吠えさせる、など工夫して練習してください。

なお、号令で吠えることを教えるのであって、単に「いつでも吠えればほめられる」と誤解させてはいけません。吠え続けたり無駄吠えをしたりする場合には、かならず終了の

号令（静かに、おしまい、など）とセットで教えてください。無駄吠えの多い犬に「静かにしなさい」という命令だけを教えようとしてもかえって難しいものですが、「吠えろ」と「静かに」の両方を教えることでコントロールが容易になります。

## 【6. 登れ、跳べ、等】

このような決断力を要する号令は、恐怖を感じない条件から徐々に馴らして行くのが基本です。「とべ（ジャンプ）」については、号令を出しながら一緒にごく低い障害物をジャンプすることから始めます。次第に障害を高くし、一緒に跳ぶのをやめ、号令で犬だけでジャンプさせるようにして行きます。

「登れ」については、普通の階段を登らせることから始めて、向こう側の見える階段、網状の階段、そしてハシゴと徐々に難しい課題にして行きます。この場合、段階を踏んでもある時点で急に恐怖感のブレーキがかかることがあります。恐怖感を持って萎縮している時には、決して強い調子で強要してはいけません。テンションが下がってなおさら動かなくなってしまいます。リードを短く持って逃げ道を封じ、登る以外の選択肢を与えないようにして励ましたりご褒美でつったりして自分から行動を起こすように仕向けます。少しでも登る方向に動いたら大げさにほめ、ご褒美もどんどん与えてやります。途中で飛び降りて逃げるような経験をさせると一層恐怖感を強くしてしまいますので、くれぐれも注意して、やめるという選択肢がないことを教えます。ハシゴ以外の、不整な瓦礫や岩場の登りについても同様です。

## 【7. 自発する行動すべてに号令を作る】

犬が自然に発する行動のすべてに号令を決めておけば、犬がやりたいことを先回りして号令としてやらせ、常にはめてやることができます。この方式を取るなら許可一般の号令は不要です。食事の時は「よし」ではなく「食べて」、脚側行進からの解除は「離れて」興味の対象に向かって行くのは「行け」などです。このようにすれば、餌を食べることさえ「食べて」の号令に従ったことになり、ほめてやることができます。

この考え方は問題行動のコントロールでも役に立ちます。その犬が頻繁にやる行動というのは、ほとんどの場合、遺伝的な強い衝動にもとづくものです。それが人間にとって不都合だからといって抑えることだけを考えていれば、次々に形を変えた問題となって現れます。持って生まれた衝動は必ず何らかの形で発散させてやらなくてはなりません。それ



は「行動のご褒美」として最高のものですから、号令を作ってトレーニングに上手に利用した方が賢明です。引っ張りっこ、追いかっこ、格闘ごっこ、段ボールを引きちぎること、吠えること、穴掘りなど、その犬が好きなことについて号令を決め、ルールを決めた遊びとして定着させて行って下さい。そして、行儀よくしていた時（望ましい行動を自発していた時）や号令に従った後などに、ご褒美としてやらせるようにして下さい。

## ～～～ 19 生活の中での訓練 ～～～

### 【1. 意味のある命令を出す】

ある程度覚えてからは、実用的な意味を見つけながら命令を出してやる方が良いでしょう。頭の良い犬ほど、命令に従う際にも何らかの自己判断をしています。訓練のためだけの時間を設けて、無意味に伏せたり座ったり立たせたり、という練習を繰り返しているとすぐに飽きて意欲が低下してしまいます。散歩の時に交差点の前で座らせる、知人と立ち話をする時には足元に伏せさせる、大型車が来たら端に避けて立ち止まる、人ごみの中では脚側行進で歩く、など、生活の中で練習を続ける方が実際に役に立ちますし、犬も意欲がわくようです。持来（持ってこい）や人探し（家族を呼んでくる）などができれば、実際に役に立つ場面が増えてきます。何か得意な仕事を持たせて、家族が本心からほめてやっていれば、犬自身も家族の中での役割を自覚してくるものです。

状況に応じた実用的な命令を与えることは、犬の持っている判断能力を日常生活の中に生かす訓練にもつながると思います。ただし、先を読んで勝手にパターン化した行動をするだけでは命令に従う練習にはなりません。指示の出し方が定型化してしまわないようによく工夫してください。

なお、競技会が目的の訓練であれば、号令に対して反射的に従うように、一切考える余裕を与えない練習が必要かも知れません。これについてはその道の専門家の指導を仰いでください。

### 【2. バランスの取れた性格を作る】

近寄る犬は遠ざけ、離れる犬は引きつけましょう。いつも人間にまとわりついてくる寂しがり犬に対しては、なるべく距離を保つように心がけてひとりでも過ごせるようにし

てください。自立心が高く、ひとりであることが全く平気な犬に対しては、飼い主への関心がそれないように、常に「次は何をするのだろう」と期待させるようにしてください。

活発な犬は抑制し、ゆっくりした犬にはターボスイッチを探してあげましょう。いつもテンションが高くて活発な犬は、いつでもずっと静かになるようにトレーニングを積んでください。ガチャガチャしている時には関心を払わず、静かにしている時に相手にしてあげてください。（ずっと静かにすることは不可能なので、どこかで発散させることも必要ですが）いつも動作が鈍い犬には、シャキッとさせる合図のようなものを作ってあげると便利です。その犬が少しでも興奮することをいくつか探しておいてください。それを上手に利用しながら、飼い主の意のままにテンションを上げられるようにしましょう。

いつまでも子供っぽい犬にはおとなの落ち着きを与え、分別臭い犬には遊び心を失わないように仕向けましょう。子供っぽい犬は、子供扱いしたり子犬のような遊びをさせ続けることでずっと幼児性が残ってしまうものです。同じことをやらせるのであっても、遊びではなく仕事という雰囲気を作り、落ち着いた褒め方をしてあげてください。逆に、落ち着きすぎた犬はおとなになるとあまり遊ばなくなってしまう。遊ばない犬には新しいことを教えるのが難しいものです。毎日必ず何らかのゲームをしてやったり、わざと子犬のような無邪気な遊びをしてやったりして、遊び心と若々しい好奇心を保つようにしてください。

常に意識して、バランスの取れた性格になるように工夫しましょう。

犬の個性や能力を良い方向に生かして育てるためには、

1. 無理な強制や拘束をせず，自然に心服させるように努める
2. 絶対に譲らないルールと犬の自主性に任せる範囲を区別する
3. 常に犬をわくわくさせ，知的な刺激を与え続ける
4. 機会を見つけては頻繁にほめる
5. 体罰はせず，犬と同じレベルでの心理的対決も避ける
6. 無理せず段階を踏んで飼い主の手に馴らす
7. 子犬の頃から意識して他人や他犬に馴らす
8. 生活の中で実用的な意味を持った訓練を続ける

以上の文章について一切の商業的利用を禁じます。愛犬家個人としての利用にとどめ，転載や引用はご遠慮ください。

著作権者： 山下國廣

〒384-0806 長野県小諸市塩野 4021

より多くの飼い主のお役に立つよう，以前は一切の制限なくテキストファイルで公開しておりましたが，引用や二次利用が見られたため，関知できない場所での不正利用を防ぐ目的でプリントアウトは有料とさせていただきます。（1,000円）

ご希望の方はメールでご連絡下さい。